

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	8・9世紀アフロユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国
Author(s)	津田, 拓郎
Citation	史学研究, 308 : 1 - 38
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055708
Right	
Relation	



8・9世紀アフロユーラシア世界における カロリング朝フランク王国

津田 拓郎

はじめに

国内外を問わず、グローバル・ヒストリーが、単なる一過性の流行にとどまらず、1つの重要な手法として着実に定着してきていることを否定するものはいないだろう。グローバル・ヒストリーは様々な形で従来型の歴史学とは異なる手法・視角を提示するものであるが⁽¹⁾、西欧中心主義的歴史像の相対化もその重要な特徴の一つとされている⁽²⁾。そもそもわが国においては、グローバル・ヒストリーの登場以前から西欧中心主義の克服を前面に押し出すような歴史像が存在していたこともあり⁽³⁾、グローバル・ヒストリーが定着した今、西欧中心主義的歴史像は完全に過去のものになったかのようにも思われる。

だが、西欧初期中世史の分野においては、国内外問わず西欧中心主義的歴史像が依然として強く残り続けている⁽⁴⁾。各種教科書や概説書において、フランク王国及びカール「大帝」は圧倒的な存在感を伴って登場するのであり、フランク王国はビザンツ帝国やアッパース朝などと並び立つ「世界帝国」の一つであるかのように描かれている⁽⁵⁾。最新の研究文献においても、カール大帝は、グローバル・プレーヤーとして同時代の世界史の中でも極めて重要な役割を担った存在とみなされているのである⁽⁶⁾。本稿は8・9世紀アフロユーラシア世界におけるフランク王国の評価が、依然として西欧中心主義の呪縛から逃れられていないことかを明らかにしたうえで、そうした見方を再考する試みである。

なお本稿は、全く新しいことを一から明らかにする作業を行うような研究ではなく、叙述の大部分は基本的に研究史・研究動向整理に終始するものである。また、著者の専門分野の偏りや能力不足故に、本稿の叙述が先行研究の網羅的な調査に基づくものとはなっていないこともまた断っておかなくてはならない。こうした不完全な調査に基づく形にならざるを得ないにもかかわらず、著者が分不相応なテーマを扱う理由は、「学校教育における西欧中心主義の克服」の必要性を強く意識しているためである（これについては補論を参照）。また、学校教育ならびに非研究者・非専門家層への歴史学の成果の伝達という側面への配慮から、本稿の叙述においては、邦語で読める研究成果がある程度優先されて提示されることとなる。学術的水準を犠牲にしてまでこうした方針をとることには異論もあろうが、この点の是非に

ついでに判断は読者に委ねることとしたい。

1. 背景：8・9世紀アフロ西ユーラシア世界

グローバル・ヒストリーということばが生まれる遙か以前から、流通経済史の分野では、フランク王国をも含むアフロ西ユーラシア世界全体を視野に入れた研究が進められてきた。その出発点となるのは、いわずと知れたアンリ・ピレンヌによる研究である⁽⁷⁾。イスラーム勢力の地中海世界への進出により、フランク王国が地中海交易から切り離され、アルプス以北における自給自足的経済に基づく「ヨーロッパ中世」が成立したというピレンヌテーゼは、現在では多くの点で批判を浴びているが⁽⁸⁾、ピレンヌの研究の画期的な点は、西欧の枠を超えてイスラーム世界までも射程に入れて考察を行ったことにある。ピレンヌへの批判者もみなそうした広い視野のもとで研究を進めていった結果、流通経済史の分野では、いち早くグローバル・ヒストリーの要素をもった歴史像が生み出されることとなったのである⁽⁹⁾。本稿の関心に照らして重要なのは、当時のアフロ西ユーラシア世界にバグダードを中心とした経済ネットワークが存在していたという知見である。邦語でもすでに90年代初頭の段階で、イスラーム史家の家島彦一がこの点を強調する単著を発表しており⁽¹⁰⁾、近年でもフランク史家の佐藤彰一が、西欧中世を扱う書物の中で、8世紀末にバグダードを中心とする巨大な交易圏が成立することを指摘している⁽¹¹⁾。

ここで問題になるのは、こうしたバグダード中心の交易圏の中に西欧をどう位置づけるかの問題である。近年の研究は、西欧が北海ルートを通じてそうした経済ネットワークに接合していたことを強調しており⁽¹²⁾、ピレンヌテーゼに見られたような「長距離交易から切り離され、経済的に停滞した西欧初期中世」というイメージは大きく後退している⁽¹³⁾。他方で、「バグダードを中心とする経済ネットワークへの接合」という同一の事象を指摘する際にも、バグダードの中心性と対比する形で西欧の周縁性を強調する見方も存在する⁽¹⁴⁾。重要なのは、前者の理解において西欧経済の「活況」が強調される場合においても、それは「従来想定されていたような停滞した中世西欧というイメージと比較した場合の活況」であって、同時代のコンスタンティノーブルやバグダードと比較した場合には、フランク王国における経済活動が相当程度劣っていたという事実を否定することはできないという点である。

当時のフランク王国の経済規模については、ヨハネス・ブライザー・カペラーの提示する事例が示唆的である⁽¹⁵⁾。彼がまず取り上げるのは、カール大帝によるいわゆる「フォッサ・カロリーナ」の造営計画である⁽¹⁶⁾。これはドナウ川とライン川を結ぶ全長3キロメートルほどの運河建設の試みであり、フランク王国史の叙述においては、カール大帝が行った大規模土木事業として、カールの偉大さを示す事例のごとくに取り上げられるのが一般的である⁽¹⁷⁾。だが、カール大帝の「大規模」

土木事業も、同時代の他の世界帝国における土木事業と比較すると、極めて小規模な試みにすぎない。プライザー・カペラーが示すように、ビザンツやアッバース朝、唐における水運事業はすべて百キロメートルを超える規模であり、投入されている人的・物質的資源は「フォッサ・カロリーナ」とは比べ物にならないのである⁽¹⁸⁾。

同様のことは、フランク王国と他の世界帝国の「首都」の規模の比較からも明らかになる。高校生向けの世界史図録に掲載された8世紀の都市の比較の図⁽¹⁹⁾からは、カール大帝の「都」⁽²⁰⁾アーヘンの王宮が、人口百万を数えたといわれるバグダードや長安はおろか、日本の平城京と比べても極めて小規模なものにすぎなかったことが読み取れる。当時のアーヘンの人口規模については全く手掛かりがないが、どれだけ多く見積もっても数千人を超える人口が住んでいたとは考えられないのである。

こうした情報を踏まえると、カール大帝のフランク王国が、アッバース朝や唐といった当時の世界帝国と比較すると経済規模の点で大いに劣っていたことは間違いない。また、すでに述べた流通経済史の分野の知見によれば、8・9世紀アフロ西ユーラシア世界の中心はバグダードを初めとした東地中海・中東地域であり、西欧は「周縁」に位置していた。

ところが、こうした経済規模における格差や流通経済の分野におけるバグダードの中心性は、カール大帝を同時代の国際政治の中に位置づける作業において十分に踏まえられてこなかったように思われる。以下本稿ではカール大帝に対する「過大評価」の歴史をたどったうえで、当時のアフロ西ユーラシア世界の経済的中心たるバグダードのハールーン・アッラシードとカールの使節交換を取り上げて、従来のカール大帝およびフランク王国の位置づけに関する理解を書き換えることを試みる。両王朝間のやりとりに入る前に、まず次章において、8・9世紀アフロ西ユーラシア世界におけるカール大帝とフランク王国の位置付けがいかなる形で理解されてきたのかについて、研究史を概観しておこう。

2. 研究史：8・9世紀アフロ西ユーラシア世界におけるカール大帝とフランク王国

わが国における研究史の大まかなトレンドを把握するために、ここではまず『岩波講座世界歴史』の分析を行うこととする。1969年から1971年にかけて刊行された旧版のシリーズにおいて、本稿のテーマと関係する論考が収められているのは第7巻『中世1－中世ヨーロッパ世界1』⁽²¹⁾と第8巻『中世2－西アジア世界』⁽²²⁾である。

第8巻に収録された論考はすべてイスラーム世界内部の叙述に終始しており、外部世界との関係性をテーマにした論考は見られない。

第7巻では平城照介「イスラムの発展と地中海世界」⁽²³⁾が、ピレンヌテーゼの再検討を行う論考として、イスラーム世界までも射程に入れた視野の広い叙述を行っており、アラブとビザンツの争いを軸に当時のアフロ西ユーラシア世界（平城の表現によるなら「地中海世界」）の歴史が描き出されている。

他方で、第7巻を全体として見た場合、叙述の比重は圧倒的にフランク王国にあり、平城の章はむしろ「浮いた」存在となっている⁽²⁴⁾。ビザンツ史家による国際政治をテーマにした論考である渡辺金一「8－9世紀初頭のビザンツ帝国とフランク王国」および渡辺金一・田中陽児「正教世界の成立」⁽²⁵⁾においても、分析の中心はビザンツ－フランク関係におかれ、「サラセン人」はわき役のような位置づけしか与えられていない。「中世初期におけるキリスト教世界内部の東方と西方との交渉関係を、専ら政治史および政治理念史的観点から一貫して追求し、『正教世界の成立』を国際的政治環境の側面から確定しようとする」と目指す⁽²⁶⁾というテーマ設定ゆえに、焦点があてられるのもイタリアおよび一部のスラヴ地域のみであって、ビザンツ以東は視野の外に置かれてしまっている。旧版の『岩波講座世界歴史』では（平城による重要な例外はあるものの）、全体としてはキリスト教世界とイスラーム世界が完全に切り離されて扱われているとみなしてよいだろう。

西欧史とイスラーム史の断絶という問題は、1998－1999年にかけて刊行された『岩波講座世界歴史』新版においても完全には解消されてはいない。第7巻『ヨーロッパの誕生4－10世紀』⁽²⁷⁾には旧版ほどのフランク偏重はみられないものの、アフロ西ユーラシア世界全体を射程に入れた章は見あたらず、旧版において平城が一定程度実現していたような、フランク王国の当時の世界における位置づけを把握できるような叙述も失われてしまっている。ビザンツ史家の大月康弘による「ピレンヌ・テーゼとビザンツ帝国－コンスタンティノーブル・ローマ・フランク関係の変容を中心に」⁽²⁸⁾は、副題が示唆するように、イタリアを舞台としたビザンツ－フランク関係に焦点をあてた論考であり、イスラーム世界はほとんど検討の対象外となっている。大月の論考は「ピレンヌ・テーゼ」をタイトルに掲げてはいるものの、旧版においてイスラーム世界をも含めた「地中海世界」全体を射程に入れて「ピレンヌ・テーゼ」に取り組んだ平城照介の論考とは大いに性格が異なっており、明確に渡辺金一の論考の問題意識を引き継いでいるものと理解できる。

『岩波講座世界歴史』第7巻には、もう一人のビザンツ史家である井上浩一による「都市コンスタンティノーブル」⁽²⁹⁾も収録されている。4－10世紀のビザンツ史を都市コンスタンティノーブルを軸に描き出す井上は、イスラーム勢力をも含めた周辺の諸勢力との関係を丁寧に描き出し、当時の世界におけるビザンツ帝国の位置づけを浮かび上がらせることに成功している。他方で、大月論文においては当時のビザンツ外交の最重要事項であったかのように描かれていた対フランク関係が、井上論文で全く言及されていない点は注目に値する。同じ時期のビザンツ外交を扱っ

た2つの論考で、全く異なる歴史像が生み出されているのである。

また、旧版と異なり、第10巻『イスラーム世界の発展7-16世紀』には、イスラーム世界の対外関係を扱う太田敬子「ビザンツ世界とイスラーム」⁽³⁰⁾が収録されている。ビザンツとイスラーム世界の境域の歴史を描き出す本稿冒頭で、太田は「ビザンツ帝国はイスラーム勢力にとって最大のライバルであった」⁽³¹⁾と述べ、カリフ政権の政策がビザンツ帝国の動向から大きな影響を受けていたということを指摘している（なお、当然のことながら太田の叙述にはフランク王国は一切あられない）。

以上のごとく、『岩波講座世界歴史』新版においては、井上および太田の論考において、キリスト教世界とイスラーム世界の間を超越した視点があらわれている。だが、二つの論考は別々の刊本に収録されており、また、大月の描き出す対フランク関係を強調する叙述とフランクに全く言及しない井上や太田の叙述を総合的に把握できるような「総説」が欠けているため、本稿の関心事である「8・9世紀アフロユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国の位置づけ」を、本講座を通じて把握することは困難であるといわざるを得ない。

こうした問題は、『岩波講座』に限定されたものではない。例えば、河出書房新社の『世界の歴史』シリーズ（1989年-1990年）や中央公論新社（中公文庫）「世界の歴史」シリーズ（2008年-2010年）、講談社『興亡の世界史』（2006年-2010年）といった世界史のシリーズにおいても、本稿が扱う時代については、ヨーロッパを扱う巻とビザンツやイスラーム世界を扱う巻は完全に分かれてしまっている。こうした構成が、唐やアッバース朝といった世界帝国と同様に、フランク王国もカール「大帝」のもとで同程度の繁栄を謳歌していたかのような印象を生んでしまっている可能性は否定できない。

わが国においては、個別研究において、フランク王国の政治的対外関係が扱われる場合、対象となるのは基本的に対ビザンツ関係のみであり、（フランク史家による仕事なのだからある意味当然ではあるが）その歴史像はやはり西欧中心主義的な傾向を有していた。一つ一つの事例をあげることは控えるが、わが国のフランク王国とカール大帝に関する歴史叙述においては、フランクとビザンツの間の経済格差が強調されることも、フランクの周縁性が強調されることもなく、カール大帝はビザンツ皇帝と完全に対等な立場で、または時にビザンツ皇帝をも圧倒するほどの存在感をもって、当時のアフロユーラシア世界に君臨していたかのような印象すらも生みだされていたように思われる。そして、渡辺金一や大月康弘といった一流のビザンツ史家が、『岩波講座世界歴史』という影響力の大きいシリーズに「対フランク外交」を最前面に押し出した論考を寄稿していることもまた、当時のビザンツ帝国のもっとも大きな関心事が対フランク問題であったという印象を生み出すとともに、西欧（＝フランク王国）中心主義的な歴史像に（おそらくは彼らの意図に反して）加担してしまっていた可能性がある。

こうした西欧中心主義的傾向は邦語文献に特有のものなのだろうか。管見の限り、海外の研究者においても、広くアフロ西ユーラシア世界の中にカール大帝とフランク王国を位置づける試みは、上述の流通経済史の分野を例外として、近年まで行われてこなかったように思われる。他方で、本稿のテーマであるカール大帝とハールーン・アッラシードの間の使節交換に関する研究は、早くから行われてきた。だがこうした研究が西欧史家によってのみ行われてきたこともあってか、そこに見られるのは多分に西欧中心主義的な態度であったように思われる。こうした態度がもっとも顕著にあらわれている例として、邦語にも訳されているミシェル・パストゥローの叙述を引用することとしよう（下線は引用者による）。

…カール大帝が求めていたのは…象であり、これこそが大帝の宮廷に古代ローマの皇帝や東方のビザンティウムやイスラムの君主たちの宮廷に匹敵するような威信を与えるに違いなかった。この目的で、おそらく早くも797年末から、未来の皇帝はバグダッドのカリフ、『千夜一夜物語』の中心人物でもある有名なハールーン・エル・ラシッド（正義のハールーン）に使者を送っていた。実際のところ、伝説と詩人たちによってこの君主の栄光と豪華は大いに誇張されている。アバシッド王朝五代目のこのカリフは786年から809年にかけて東方のイスラム圏を統治したが、その治世にはとりたてた栄光も華々しさもなかった。ギリシアのビザンティウム帝国への襲撃と798年ないし799年のカール大帝の使者のバグダッド到来を除けば、目立った事件はなかったとさえいえる。西洋最強の王からの依頼に気をよくし、ビザンティウム女帝に敵対する同盟関係をカール大帝と結ぶことが可能だと見て取ったハールーン・エル・ラシッドは、カール大帝に多くの贈り物をした。すなわち豪華な織物、宝石、象牙製品、インドから輸入した香辛料と香水、水時計、見事な絨毯、すばらしい鞍、鳥、猿、豹、そして何よりも二頭の象であった⁽³²⁾。

パストゥローが贈り物として列挙している物品には、同時代史料にあらわれないものが多く、「二頭の」象という情報の出所も不明である⁽³³⁾。だが何より問題なのは、ラシードの治世への過大評価を指摘し、返す刀でカール大帝を持ち上げるかのような筆致である。フランク史家である本稿の著者には、ラシードの治世に「栄光も華々しさもなかった」のかどうかを判断する資格はないためこの点への論評は控えるが、ビザンツへの攻撃と並ぶ「目立った事件」としてカールの使節到来をことさら特別視する態度は、まさしく西欧中心主義の極みであろう。後述するように、ラシード自身は、カールからの使節到来を、自身の治世を代表するような出来事とみなしていなかった可能性が高く、「西欧最強の王からの依頼に気をよくし」という情報も史料的根拠を欠く空想の産物である。もちろん、西欧の歴史家にとっては西欧の歴

史が「自分たちの歴史」なのだから、「西欧中心」に歴史を見ること自体に問題がないとする立場もあり得るかもしれないが、ここで問題としたいのは、「西欧中心」の視点それ自体ではなく、同時代における「西欧」の位置づけを周辺諸国と同格視したり、ひいては周辺諸国を圧倒していたかのような印象を生むような歴史像を生み出したりすることである。

もちろん、海外の研究すべてがパストゥローのように史料に基づかない軽率な記述を行っているわけではない。第3章で取り上げるボルゴルテ、セナック、ハックといった独仏の研究者らは、同時代史料に基づきカールとラシードの間の使節交換の実態を丁寧に復元している。他方で、彼らの仕事においても、第1章で示したような東西の圧倒的な経済格差を踏まえうえて考察が行われることはなく、結果として当時のアフロユーラシア世界にカール大帝とフランク王国を正確に位置づける作業は行われなままとなってしまう。

こうした例としてここでは、2013年に行われたワークショップに由来する論集『皇帝たちとカリフたち』⁽³⁴⁾を取り上げよう。本書は「カール大帝と800年頃地中海世界の諸権力」という副題をもつが、実際の所、収録されている論考の多くは、フランク王国、ビザンツ帝国、アッバース朝などを別々に扱ったものであり、本書全体がカール大帝を800年ごろの地中海世界に位置づける作業を行っているわけではない⁽³⁵⁾。本稿の関心に照らして重要なのは以下にあげる2論考である⁽³⁶⁾。

まず、本稿冒頭でも言及したボルゴルテの研究を取り上げよう⁽³⁷⁾。ボルゴルテは、グローバル・ヒストリーの研究手法に根ざす形で、「帝国（主義）的拡張」、「移住」、「長距離交易」の3点を取り上げてカール大帝治世を分析し、カールの征服・移住政策がそれほど大規模なものではなかったことや、カールが「純粋にヨーロッパ的な帝国の支配者にとどまっていた」という点を指摘するなどやや抑制的な記述を行う一方で、カールがアラブの長距離交易とフランクの交易ネットワークを結びつけたことを高く評価し、カールの聖地への支援を「驚くほどグローバルな功績」と持ち上げ、「彼〔カール〕が『グローバル・プレーヤ』としてアラブ人に劣っていたと考えるのは誤りであろう」と結論づけるのである⁽³⁸⁾。だが、最後の陳述の根拠は、ムスリムが異教徒の世界に住むことを禁じられているのに対し、カールの臣民であるキリスト教徒はそうではなかったため、「越境」というグローバル化の指標により合致するのはキリスト教徒の側であるというこじづけのような論理である。ボルゴルテの研究が全体として、最新の研究動向も踏まえつつ一次史料に基づいて丁寧に進められているだけに、結論部分で突如あらわれるカールへの称賛は、同時代におけるカールの位置づけを過大評価する方向での誤解を生みかねない不意な記述であるといわざるを得ない。

ボルゴルテの論考が最終的に「カールはどの程度グローバル・プレーヤーか」という問いに収斂していくのに対し、本稿の問題関心と同様に当時の世界の中にカー

ル大帝を位置づけようと試みているのが、ヴォルフラム・ドレウスによる論考である⁽³⁹⁾。ドレウスは冒頭で「バグダードやコンスタンティノープルから見れば、カールは遠方の蛮族の一君主に過ぎなかった」⁽⁴⁰⁾と指摘しており、この指摘の時点ですでに従来型の西欧中心主義的歴史叙述とは一線を画す、現段階でもっとも重要な先行研究と考えると良いだろう。だが、カールの外交活動を幅広く検討した結果ドレウスが下す結論は「カールはもはや、西方の蛮族の一君主、北方の新参者、皇帝権力の篡奪者ではなくなり、地中海的帝権を担う一人の君主として認められる存在になった」⁽⁴¹⁾というものであり、同時代世界におけるカールの位置づけについては、伝統的な過大評価路線に従うものになってしまっている。問題は、こうした結論にいたる議論がすべて、カールの自己認識の分析に由来している点である。ビザンツやカリフ政権がカールをどのように認識していたのかについては、冒頭の陳述の後は全く議論が行われていないのである。結局の所ドレウスの結論も、西欧中心主義の呪縛から逃れられていないと評価せざるを得ないだろう。

こうした叙述が生まれ続ける背景には、わが国同様フランク史家と初期イスラーム史家の間の没交渉という問題が存在するように思われる。2018年に刊行されたアッバース朝とカロリング朝との「比較研究」であると称する論文集⁽⁴²⁾においても、個別の章においては両者の比較は全く行われておらず、それぞれの王朝を専門とする研究者がそれぞれの研究対象についての成果を披露しているにとどまっている。唯一比較らしきものを提示している序論⁽⁴³⁾においても、カロリング朝とアッバース朝の間の表面上の「類似点」が強調されるにとどまっており、両方が文明の基盤をつくった王朝として極めて高い評価を与えられていて、本稿第1章で示したごとき、同時代における流通経済のありかたや両王朝の経済規模の違いなどへの言及はほとんど見られない⁽⁴⁴⁾。序論によれば、この種の比較の試みは本書以前には皆無であったとのことであり⁽⁴⁵⁾、そうした状況がフランク王国とアッバース朝の経済規模の格差や、アッバース朝の中心性・フランクの周縁性には注目せず、「類似点」のみに目を向けるという手法を生んでしまっているのかもしれない。

以上のように、外国語の研究においてもわが国の歴史叙述同様の、西欧史家と初期イスラーム史家の間の没交渉と、それに由来する西欧中心主義ないしは西欧を過大評価するような歴史像の成立という問題が存在することが明らかになった。しかし近年になって、欧州の研究者の中から、こうした見かたを疑問視する研究が現れ始めている。例えばカール大帝没後1200年に際してその伝記的研究を公表したドイツのヨハネス・フリートは、小ピピン時代のビザンツやアッバース朝とのやりとりと言及する際に、8世紀中頃のフランク王国には世界情勢を把握して対応する能力が欠けていたという点を指摘し、東方との接触を通じてフランク側が自分たちの文化的な遅れを強く意識した可能性があるとも述べている⁽⁴⁶⁾。フランスでは、2012年に国際シンポジウムの成果をもとに、イスラーム世界を中心に据え、西欧から日

本・中国までもを対象とする諸論考を収録する『中世文明の十字路口に位置するイスラーム』が刊行された。これは、初期中世のみを扱うものではないが、イスラーム世界を「十字路口」と位置付け、世界史的視点を前面に打ち出した諸論考を納めているという点で画期的なものである。こうした性格を持つ書物の編者が初期中世西欧史を牽引するドミニク・バルテルミとミシェル・ソーの二人であることも大いに注目に値する⁽⁴⁷⁾。

こうした西欧中心主義を脱して世界史的視点で（西欧で言うところの）初期中世を捉えようとする方向性をもっとも進めたものが、先に言及したヨハネス・プライザー・カペラーによる『ローマとカール大帝の向こう側』である⁽⁴⁸⁾。プライザー・カペラーは、西欧中心主義からの脱却を掲げ、「長い古代末期（300–800）」のアフロユーラシア世界を総合的に叙述することを試みており、ヨーロッパや北アフリカから日本や中国、インド、チベットまでの広大な領域に関する膨大な情報を292頁にまとめて提示するが、従来型の歴史叙述と異なり、その叙述においてはカール大帝やフランク王国はほとんど居場所を与えられていない⁽⁴⁹⁾。西欧を恣意的に無視する手法には、フランク史家からの正当な批判も見られるが⁽⁵⁰⁾、従来型の歴史叙述を相対化するという意味で、本書のインパクトは小さくないものであると言って良い。

3. カール大帝とハールーン・アッラシードの間の使節交換

3-1. 史料にあらわれる使節交換の情報

本稿ではここまで、カール大帝のフランク王国が、流通経済的にはバグダードを中心とするシステムの「周縁」に位置していたにすぎず、経済規模の面でもフランク王国とアッバース朝との間には圧倒的な格差が存在していたこと、それにもかかわらず国内外の歴史叙述においてはフランク王国が長らく「過大評価」を受けていたことを指摘した。本章では、当時のアフロユーラシア世界の経済的「中心」であったバグダードとフランク王国の間の外交使節のやりとりについて、史料に基づいて再検討を行いたい。カール大帝とハールーン・アッラシードの間の使節交換については、邦語の文献でも折に触れて言及されるものの⁽⁵¹⁾、史料に基づいた研究は著者の知る限りこれまで行われてこなかった。他方で、欧文の研究においては、同時代史料を網羅的に分析したものが複数知られている⁽⁵²⁾。以下ではそうした先行研究を参考にしつつ、まずは史料情報を確認したうえで、この使節交換をどのように捉えるべきなのかについて、本稿のここまでの指摘をも踏まえたうえで再検証していく。

フランク君主とアッバース朝カリフの間の使節交換の情報が初めてあらわれるのは、小ピピンとマンスールの時代である。この時代の使節交換については、『フレ

8・9世紀アフロ西ユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国（津田）
『デガリウス年代記続編』⁽⁵³⁾にのみ簡潔な記述が残されている。ここでは、3年前に
ピピンが送っていた使節が「サラセン人」の使者を伴って帰還し、「サラセン人」
の使者がピピンに贈り物をもたらしたこと、ピピンが当該使節に贈り物を与えて海
路で帰路につかせたことなどが記述されているが、使節の目的や、交渉内容など
については一切言及がなく、贈り物の内容も明らかにされていない⁽⁵⁴⁾。

カール大帝時代になると、フランク・アッパース朝間の使節のやりとりについて
の情報がより詳細に記録されるようになる。ただし、使節の目的や交渉内容につ
いての言及がない点はピピン・マンズール間の使節交換の情報と変わりはない。以下、
同時代史料として唯一このやりとりの詳細を伝える『フランク王国年代記』の記述
を引用しつつ、経過を確認していこう⁽⁵⁵⁾。

…そして年が変わり801年。…（皇帝戴冠後のローマ滞在の記述に続いて）…
皇帝はスポレトからラヴェンナに来て、何日かそこに滞在し、パヴィアへ向かっ
た。そこで彼に、ペルシア人たちの王アーロン・アミール・アル・ムニン⁽⁵⁶⁾
の使者らがピサのポルトゥスに到着したという情報が伝えられた。皇帝は彼ら
に向けて使者を派遣し、ヴェルチェリーイヴレア間で彼らと対面した。彼らの
内の一人は東方のペルシア人で、ペルシア人の王の使者、もう一人はアフリカ
のサラセン人で、アフリカ辺境のフスタートで統治していたアミール、アブラ
ハム⁽⁵⁷⁾の使者であった。皇帝が4年前に、ラントフリドゥスとシギムンドゥ
スとともにペルシア人たちの王へと送っていたユダヤ人イサク⁽⁵⁸⁾が、多くの
贈り物とともに帰路についていることを、[2人の使者は]伝えた。ラントフ
リドゥスとシギムンドゥスはどちらも死亡していた。それ故、皇帝は書記エル
カンバルドゥスをリグリアに送り、象やその他の贈り物を輸送するための船団
を準備させた。皇帝自身は洗礼者聖ヨハネの誕生[6月24日]をイヴレアで祝
い、アルプスを越えてガリアへと戻った。…（ヒスパニア、イタリアでの戦果
の記述）…この年の10月、ユダヤ人イサクがアフリカから象とともに戻り、ポ
ルトヴェネーレに入った。そして雪でアルプスを越えられなかったため、ヴェ
ルチェリで冬を越した。皇帝はアーヘンの宮廷で主の誕生を祝った⁽⁵⁹⁾。

そして年が変わり802年。…（ビザンツとの使節交換の記述に続いて）…同じ
年の7月20日、イサクが、ペルシア人たちの王が贈った象や他の多くの品と
ともに戻り、アーヘンですべてを皇帝に届けた。象の名はアブル・アッパースで
あった。…⁽⁶⁰⁾

さまざまな使節が行き来しており経緯がわかりにくいですが、時系列をまとめると以下
のようになる。

- 1) 797年カールがラントフリドゥス、シギムンドゥス、ユダヤ人イサクを含む使節を東方に派遣（前2者は帰還前に死亡）
- 2) 801年前半、東方からの使節がピサに到着したとの情報がバヴィア滞在中のカールに伝えられる
- 3) 東方からの使節に対してカールが使者を派遣し（おそらく合流場所を伝えて）、カールと東方からの使節がヴェルチェリ・イヴレア間で対面。東方からの使節は、イサクが贈り物とともに帰路についていることをカールに報告
- 4) 書記エルカンバルドゥスにリグリアで船団を準備させつつ、カール自身はガリアへ帰還（6～7月）
- 5) 10月（おそらくエルカンバルドゥスの船団を用いて）イサクが海路でイタリア（ポルトヴェネーレ）に上陸
- 6) イサクはヴェルチェリで越冬し、翌年7月20日にアーヘンに到着

なお、『王国年代記』を初め、フランク王国の史料は基本的に、外国からの使節の「到着」や自身が派遣した使節の「帰還」については記録するが、外国への使節「派遣」については記載しない。『王国年代記』の797年の記述にも、東方への使節派遣の情報はあられもない。われわれは801年の記述を見て初めて、カールが4年前にハールーン・アッラシードに使節団を派遣していたことを知るのである。ここでは、おそらくビザンツ領を回避するため、北アフリカからイタリアに渡るルートが選択されていること、贈り物の中でも特に、象がその名前とともに言及されていることが注目に値する⁽⁶¹⁾。

その後、東方からの使節は807年に再びカール宮廷に到着している。再び『フランク王国年代記』の記述を見てみよう

…（806年の記述の末尾）パトリキウス・ニケタスが率いる船団が、ダルマチアを奪還するために〔ビザンツ〕皇帝ニケフォロスによって派遣された。そして、およそ4年前にペルシア人たちの王へと送られていた使節は、まさにそのギリシア人たちの船団の停泊地を通過し、敵に知られることなく、トレヴィエゾの港の避難所へと帰還した。

皇帝は主の誕生をアーヘンで祝った。

そして年が変わり807年。…（この年起こった天体現象の記述に続いて）…皇帝の使者ラドベルトゥスは、東方から戻る間に死んだ。そしてペルシア人の王の使者でアブデッラという名の者が、エルサレムからの修道士らとともに、皇帝の前に到着した。この修道士らは、総主教トマの使節として活動しており、ゲオルギウスとフェリクスという名であった。このゲオルギウスはオリーヴ山の修道院長で、その祖国はゲルマニアであり、そもそもの名前においてはエギ

8・9世紀アフロ西ユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国（津田）

ルバルドゥスと呼ばれていた。アブデッラらは上述の王が皇帝に送った贈り物を届けた。つまりテント一つと驚くほど大きく美しい、さまざまな色で作られた宮殿の天幕である。天幕やその綱に加えて、すばらしい布地すべてが色とりどりに染められていた。上述の王のさらなる贈り物は、多くの絹、高価でかわわしい香料やバルサムであった。さらに機械仕掛けで不思議な作りの真鍮製の時計も贈られた。そこでは12時間の流れが水時計に従って示され、それぞれの時刻の終わりに落下してシンバルを鳴らす青銅の小さな玉12個が備わっており、毎時間のおわりには同じ数の騎兵も窓から出てきて、それまで空いていた同じだけの窓を閉める。さらに他の多くの贈り物がこの時計の中にあり、それらは今列挙するには多すぎる。また上述の贈り物の中でも真鍮製の二つの燭台は驚くほど高く巨大であった。これらすべてはアーヘンの宮廷の皇帝のもとへ届けられた。皇帝は使節と修道士たちを一定期間自分のもとにおき、その後イタリアへと送り、そこで航海の時を待つようにと命じた。…⁽⁶²⁾

806年にトレヴィーズに帰還した使節を率いていたのは、807年に道中で死亡したとされているラドベルトゥスであると考えられる。ここでもわれわれは、カールが以前に使節を派遣していたことを、その帰還の情報とともに知ることとなる。「およそ4年前」との記述から、806年に帰還した使節は、801年の東方からの使節及びイサクがもたらした贈り物をうけて派遣されたものと見なすことができる。そしてその返答として、カリフは再び大量の贈り物とともにアブデッラを派遣したのであった。802年にアーヘンに到着した贈り物の記述においては象だけが特に言及されていたのに対し、ここでは多種多様な贈り物が詳細に描かれている。この記述からは、アーヘンにおいてアブデッラがもたらしたエキゾチックな物品が驚きをもって受け取られた様子が生き生きと伝わってくる。他方で、ここでも具体的な外交交渉への言及は一切見られない。ただし、この東方からの使節に聖地の修道士が同行していることに注意しておこう。この問題については後述する。

809年にラシードが死去することもあってか、このやりとりの後、史料情報は一定期間途絶える。その後、831年にカールの子であるルイ敬虔帝のもとに東方からの使節が到着したとの簡潔な記述⁽⁶³⁾とともに、フランク-アッバース朝間の使節交換に関する情報は消滅する。

3-2. 使節の目的を巡って

カールとラシードの間の使節交換について一定量の情報を含む同時代史料は、先にあげた『フランク王国年代記』のみである。では、カールとラシードの間の使節交換の目的はどこにあったのだろうか。古くから見られる見解として、フランク王国とアッバース朝が、対ビザンツ・対後ウマイヤ朝を念頭に置いた軍事同盟を締結し

たというものがある⁽⁶⁴⁾。確かに、フランク王国とアッパース朝がともに、ビザンツや後ウマイヤ朝と長年に渡って敵対関係にあったことは事実であり、「敵の敵は味方」として軍事同盟が結ばれたという説は一定の説得力をもつようにも思える。ただし、この使節交換が「共通の敵」を全く意識していなかったとは考えにくいにしても、「軍事同盟」という語が想起させるほどの、具体的な内容を伴う取り決めがなされたかどうかについては慎重な考察が必要となる⁽⁶⁵⁾。例えばセナックはカールのヒスパニア遠征やイタリア東岸での対ビザンツ戦と、ラシードによるビザンツへの攻撃の時期が一致していることを強調するが、そもそもフランクとアッパース朝の宮廷間を1使節が往復するだけで約4年を要したのである。その間にも両国と後ウマイヤ朝・ビザンツの間の関係は刻一刻と変化していることを考えるなら、敵を「挟み撃ち」にするような具体的な軍事作戦が協議されたとは考えにくい。私見では、「フランク王国・アッパース朝同盟」対「後ウマイヤ朝・ビザンツ同盟」という歴史像は、またしても西欧中心主義やフランク王国への過大評価、さらには西欧史家におけるフランク外の動向への無知から生じた産物のようにも思える。史料が直接的な陳述を行っていない以上⁽⁶⁶⁾、この問題についても、当時のアフロ西ユーラシア情勢をより詳細にたどったうえで、全面的な再検証を行う必要があろう⁽⁶⁷⁾。

先行研究は、エルサレムにおけるキリスト教徒の待遇に関する問題も交渉の議題であった可能性を指摘している⁽⁶⁸⁾。前述のごとく807年の東方からの使節にはエルサレムの修道士も同行していたことが伝えられており、『フランク王国年代記』には、799年と800年にも、エルサレムの修道士が総主教からの贈り物を携えてカールのもとに到来したことが記録されている。また、799年に到来した使節の帰還時には、フランク側も司祭ザカリアスを同行させて送り返しており、800年のエルサレムからの使節はそのザカリアスとともにローマのカールのもとを訪れている⁽⁶⁹⁾。確かに『フランク王国年代記』は、807年の事例と異なり、これらのエルサレムとの使節交換とアッパース朝との使節交換との間の結びつきに一切言及していない。だが、この時期エルサレムがアッパース朝の支配下に置かれていたことを考えるなら、両者の間に何らかの関係を推測することは許されるだろう。当時聖地のキリスト教徒は教会組織を維持することを許されており、外部からの巡礼者も訪れていたものの、聖地における教会・修道院は、アッパース朝における政変などに伴ってしばしば略奪を受けるなど、安定的な状態に置かれていたわけではなかった⁽⁷⁰⁾。797年3月にもマル・サバ修道院が襲撃され、略奪・虐殺が行われており、何らかのルートでこのことを知ったカールが、アッパース朝との交渉に乗り出した可能性を指摘する論者もいる⁽⁷¹⁾。カールが聖地の教会を支援したことは、9世紀初頭にカールの命で作成された聖地の教会財産目録や⁽⁷²⁾、エルサレムへの寄進を呼びかける規定などからも明らかである⁽⁷³⁾。これらの証拠は、エルサレム問題がアッパース朝との外交交渉の議題であったことを直接証明するわけではないが、807年にアッパース朝

使節とエルサレムの修道士が同時にカールのもとを訪れていることや、使節のやりとりの時系列から考えても、エルサレム問題が少なくとも議題の1つに含まれていた可能性は高いと思われる。

また、先行研究の中には、ここまで述べてきたような具体的な議題よりも、相互に使節をやりとりするという行為自体に重要性を認める見解も見られる。例えばハックは象のような通常では獲得できないような威信財のやりとりを通じて、相互の関係が構築されることそれ自体が重要であったと述べており⁽⁷⁴⁾、ボルゴルテは、アッバース朝との使節交換やエルサレムへの介入を通じて、カールが当時の世界政治上の自身の地位をアピールしようとしていたという点を強調している⁽⁷⁵⁾。使節交換の時期が皇帝戴冠の前後に集中していることから、これらの見解は一定の妥当性をもつと考えて良いだろう。

3—3. 史料情報の非対称性

使節交換の目的が何であったにせよ、アッバース朝使節の到着は、フランク王国において大きなインパクトをもつ出来事だったようである。『フランク王国年代記』や後述する後代の史料の記述からは、象を初めとするカリフの贈り物がフランク人たちに驚きをもって受け取られた様子がうかがえる。他方で、フランク王国とアッバース朝の間の使節交換に関する情報は、フランク王国外の史料には一切記載されていない⁽⁷⁶⁾。このことは、アッバース朝の人びと（または少なくともアッバース朝の史料執筆者）にとって、フランク王国との使節交換が特段の関心を集めるような出来事ではなかったということを示唆している⁽⁷⁷⁾。そもそも、同時代のアッバース朝の史料にはカール大帝やカロリング朝の情報は一切あられないのであり⁽⁷⁸⁾、本研究が何度も指摘しているフランクとアッバース朝の経済格差を踏まえるなら、ラシード宮廷におけるフランク王国への関心がどれだけのものだったのかについても、改めて考え直す必要があるだろう。

だが、すべての先行研究がこうした史料および関心の非対称性に注目してきたわけではない。例えばソーは、当時の世界をフランクとアッバース朝の2極的世界としてみるべきではないとして、イスラーム世界自体が多極的であり、またビザンツにも目を向けるべきだとの指摘を行うが、先にあげた史料状況の非対称性には全く言及せず、多極的世界の中の一つの重要な「極」としてのフランク王国の位置付けを全く疑っていない⁽⁷⁹⁾。ハックはフランク外史料における使節交換への言及の不在に言及はするものの、その理由を全く考察せず、アッバース朝におけるフランクに対する関心の低さを指摘することもない⁽⁸⁰⁾。セナックは、アッバース朝宮廷においてフランクとの同盟が「秘密同盟」のような性質をもっていた可能性や、異教徒との使節交換がムスリムとして不適切なものと思われかねない行為だったために公にされなかった可能性を指摘するが⁽⁸¹⁾、そもそも、「啓典の民」たるキリスト教

徒の君主との使節交換が、ムスリムにとって口外するのもはばかれるような行いに相当したとは思えず、こうした説明は全くもって説得的とは思われない。セナックの説明は、フランク王国がアッバース朝にとって極めて重要な軍事同盟のパートナーであったという（おそらくは誤った）大前提のもとでひねり出された代物にすぎないとの印象が強い。

むしろわれわれが目すべきは、使節交換に一切言及しないアラビア語史料の例としてセナックもあげているタバリーの『年代記』において、「カール大帝」ほかのフランク君主はおろか、「フランク人」や「フランク王国」への言及が一切あらわれないという事実である⁽⁸²⁾。タバリーにおいて、中国やインド、チベットといったイスラーム世界外に属する地域が一定回数言及されていることを考えるなら、彼の思い描く「世界」にはフランク王国は含まれていなかったと考えるのが妥当だろう⁽⁸³⁾。タバリーの世界観がどれほど当時のアッバース朝の中心部の人々の世界観を代表しているのかという問題は残るものの⁽⁸⁴⁾、バグダードから見てフランク王国が世界の最果ての地にすぎなかったのであれば、イスラーム側の史料にフランクとの使節交換への言及が見られないのも当然であろう。こうしたことを踏まえるなら、フランク王国はアッバース朝にとっての対等かつ重要な同盟相手とはみなされていなかった可能性が高いのである。

3-4. アッバース朝からの贈り物

両王朝の関係の非対称性を前提としてこの使節交換を再検討すると、アッバース朝からの贈り物についても一般的なイメージとは異なる位置づけが与えられることとなる。佐藤彰一は、カールが相手に貢納を求めるかのような態度でラシードに象を所望したと述べたうえで、イスラーム圏が「いずれ自らの軍門に降る土地と認識されていた」可能性まで示唆している⁽⁸⁵⁾。だが、本稿のここまでの議論を踏まえるなら、こうした叙述は従来型の西欧中心主義を助長しかねないものであり、やや不用意なものであるといわざるを得ない⁽⁸⁶⁾。

カール大帝時代、フランク王国が周辺諸地域と活発な使節のやりとりを行っており、当時の世界情勢についてもある程度の知識をもっていたであろうことを踏まえるなら、カールはアッバース朝が、「自らの軍門に降る」ような存在ではないということを実に認識していたはずである⁽⁸⁷⁾。また、同時代史料である『フランク王国年代記』によると、バグダードからアーヘンまでの象の運搬は、アッバース朝の使節ではなくフランク側のイサクが担っている。こうしたことを踏まえるなら、ラシードはおろかカール自身ですらも、象をはじめとした贈り物を「アッバース朝からの貢納物」と考えていた可能性は極めて低いといえる。一部の研究者は「カールがラシードに象を要求した」と断定しているが⁽⁸⁸⁾、同時代史料にはそうしたことを確証するような証拠は見らない。むしろ『王国年代記』からは、イタリアでの

アッパース朝使節との会見後、アフリカからイタリアへと象を運搬するための船⁽⁸⁹⁾をカールが急遽手配しているかのような印象が得られるのであり、カールはこの時初めて贈り物に象が含まれていることを知った可能性が高い。

カールが要求したのであれば、なゼラシードは辺境の君主に対して象を贈ったのだらう。この問題についてドリユーズは、いくつかの史料が贈り物の中にあげている「布」に注目し、それがイスラーム世界においてカリフが高官や臣下にする特別な衣服であった可能性を指摘したうえで、象もそうした衣服に付随して贈られる贈り物に属するのではないかと述べている⁽⁹⁰⁾。この解釈が正しければ、カリフは明確に自身の上位性を認識したうえで外交交渉を行っていたということになる。また、ハックによると、アッパース朝においても象は役畜ではなく、威信財とみなされていて、極めて高価な贈り物に属していた⁽⁹¹⁾。同時代史料には様々な贈り物を受け取ったカールがその返答に何を送り返したのかについての情報が欠けているが、当時のフランク王国に象や機械仕掛けの水時計、巨大な燭台といった圧倒的なインパクトをもつ物品と釣り合うような返礼品が用意できたとは思えない⁽⁹²⁾。カリフ側からの莫大な贈り物には、相手方に自身の圧倒的な上位性をアピールするねらいがあったのではないだろうか。フランク側の同時代史料には、カリフからの見たこともない贈り物に大きな衝撃を受けるフランク人たちの様子が描かれており、カールを含むフランク人たちがアッパース朝カリフの絶大な権力を思い知らされたことは間違いないといえる。

3—5. 象の衝撃

東方からの様々な贈り物の中でも、特に同時代人の脳裏に強く刻まれたのはやはり象であった⁽⁹³⁾。これは、象の到着が『フランク王国年代記』以外の同時代史料でも言及されていることから明らかである。例えば、『ロルシュ年代記』は、802年にアーヘンで行われた大規模な改革会議について詳細な記述を行った後、「そしてこの年、象がフランキアに到着した」と付言している⁽⁹⁴⁾。アッパース朝との使節交換には全く言及しないこの史料の著者にとっても、802年の「象の到着」だけは、特に言及すべき事件とみなされていたのである⁽⁹⁵⁾。同様に、『小ロルシュ年代記』においても、カールの皇帝戴冠の記述に続いて簡潔に「サラセン人たちの王アモルムルスが、たくさんの高価な贈り物とともに象を届けた」との記述が見られる⁽⁹⁶⁾。この史料は大部分の記述を『フランク王国年代記』からの抜粋に基づいているもので、アッパース朝とのやりとりの中でも特に編者の関心を引いたのが象の到着であったということがうかがえる⁽⁹⁷⁾。ルイ敬虔帝時代のフランク宮廷で活動したアイルランド出身の学者ディクイルスは、象の生態について論じる際、自らの記述の正確さの根拠として「皇帝カールの時代にフランク人の王国の民は皆、象を見ていたのだから」と述べており⁽⁹⁸⁾、カールが広く臣民に象を公開していたことを示唆

している⁽⁹⁹⁾。写実性の高い象が、9世紀の写本のイニシャル装飾に見られることも、その作者が象を実際に目にしていたことの傍証となろう⁽¹⁰⁰⁾。カールが象を所有していることが広くフランク王国中で知られていたのであれば、それが彼の威信増大に貢献したのは間違いない。

『フランク王国年代記』はこの象の死についても簡潔に記述している。810年、フリジアを攻撃したノルマン人への反撃のため、カールがライン川を超え軍勢を待っているとき、「サラセン人たちの王アーロンが彼に贈っていた象が急死した」⁽¹⁰¹⁾のである。810年の記述において『王国年代記』が象に言及するのはこの1節だけであるため、象の死亡時の状況について確実なことは何も述べられないが、この部分を素直に読めばカールは象とともにノルマン遠征を行おうとしていたように思える。皇帝戴冠後のカールは巡幸の頻度を減らし、主としてアーヘンに留まっていたことがよく知られているが、数少ない遠征や巡幸に際して、象を同行させていたことがあったのであろうか。そうであれば、見たこともない巨大な動物は、遠隔地の臣民や敵の軍勢に大きな衝撃を与えたことだろう⁽¹⁰²⁾。

3-6. 交渉の記憶の「神話化」

ここまで、同時代史料の記述をもとに、フランク王国とアッパース朝の間の使節交換に関する情報をまとめてきた。前節で述べたように、この外交交渉とアッパース朝からの贈り物（特に象）は同時代人の記憶に強く焼き付けられたようであり、そうした記憶はカール死後さらに「神話化」を経験することとなる。

「神話化」の兆しは、カール宮廷に仕えていたアインハルトによってカールの死後に執筆された『カール大帝伝』においてすでにあらわれている⁽¹⁰³⁾。以下当該部分を引用しよう。

…インドを除いて、東方のほとんどすべてを領有していたペルシアの王アーロンも、カールと友情に満ちた協調関係を保ち、全地球上のすべての王や元首の友誼よりもカールの好意を優先させ、カールだけが名誉と贈物で敬意を払うに値する人物と見なしたほどである。そういうわけで、王が奉納物をもたせて、われらの主にして救済者たるキリストの聖墓と復活の場所へ使節を送ったとき、使節がペルシア王のところへ行き自分らの主君の意向を伝えると、王は要求を受諾したばかりか、贖罪の行われたあの聖地をカールの権限のもとにおくことにも同意した。そして使節が帰国するとき、王はこれに自分の使節を加え、着物や香料やその他の東方の財宝とともに巨大な贈り物を、カール王にことづけた。巨大な贈り物というのは、数年前その時彼が唯一頭しかもっていなかった象をカールが所望したので、今度送ったものである⁽¹⁰⁴⁾。

ここでは「アーロン」（ハールーン・アッラシード）は、誰よりもカールとの友好関係を重視していたことにされており、カールの意向を受けて聖地を彼に譲り渡したと述べられている。また、カールが贈られた象も「彼が唯一頭しかもっていなかった象」になり、それがカールの所望を受けて贈られたことにされている。ここで描かれるストーリーは、聖地問題に関する交渉や象の贈与といった史実を核にしているため、同時代の読者にとっても一定の説得力をもったことだろう⁽¹⁰⁵⁾。巧妙に話を膨らませたこの記述の中で、カールは、広大な支配領域を有する「ペルシア王」の最大の友人として描かれており、その姿はまさに「グローバル・プレーヤー」のそれである。この部分における誇張がアインハルトに由来するのか、彼の情報源がすでにこうしたストーリーを有していたのかは今となっては分からない⁽¹⁰⁶⁾。確実なことは、アインハルトの『カール大帝伝』が中世を通じて広く流布し、多くの人々に読まれたという事実である。現在でも一部の書物はアインハルトの記述を無批判に受容しており、その影響力の大きさは計り知れない。

アインハルトからさらに2世代後の9世紀末に執筆されたノトケルス『カール大帝事跡録』⁽¹⁰⁷⁾においては、「誇張」の範囲を大きく超えた「創作」含みのストーリーが描かれている。ノトケルスの記述は長大ですべてを引用することはできないため、ここではストーリーのプロットのみをまとめることとしよう。

- 1：「ペルシア人の使節」の到着、カール宮廷の豪華さに感嘆する使節団
- 2：カール一行と使節団が合同で狩猟を行う
- 3：使節団は「象と猿、香油と甘松香、さまざまな軟膏、香辛料、香料、種々の薬物」を献上。それは「東方がすっかり空となり、西方がいっぱいになったと思われるほど多量」であった
- 4：使節団とカールのやりとり。使節団はカールの名声を讃えるとともに、道中での扱いの悪さを訴えると、カールは使節団を冷遇した者たちに厳罰を与える
- 5：「アフリカの王」の使節が「マルマリカのライオン、ヌミディアの熊、ヒベリアの暗赤色染料、チュロスの紫紅染料、同じアフリカのその他の珍しい土産物」とともに到着
- 6：「アフリカ王」や「リビュア人」をカールが服属させていたことの説明
- 7：カールがペルシアに返礼として使節を派遣し、「ヒスパニアの馬や驃馬、フレソネス製の白色・灰色・青色の外套、ペルシア王が以前求めていた敏捷でどう猛な犬」をもたせる
- 8：当初不遜な態度であったペルシア王に対し、フランク使節は犬とともにライオンを仕留め、ペルシア王はカールの偉大さを思い知る
- 9：ペルシア王はエルサレムをカールに委ねることを決め、「予は彼の代官と

してその地を管理しよう」と提案。カールのその後の処置により、「パーティアーゲルマニア」間の往来が容易になった

10：慣習として存在していた1フーフエにつき1デナリウスの税が聖地への寄付のためのものであったことの説明

アインハルトにおいて、カールとラシードは友好関係で結ばれたある種対等な立場のように描かれていたが、ノトケルスにおけるラシードは、カールおよびカール使節の引き立て役のような描かれ方になっており、両者の関係はカールを上位に置くものへと変化している。こうした作りは、ストーリー冒頭の1の部分で、「ローマの名声は世界中にとどろきわたっていたし、そこを当時カールが治めていることは、彼らも知っていた」と記述し、4の部分で「バルシア」の使節団に「われわれバルシア人は、いやメディア人でもアルメニア人でもインド人、パーティア人、エラミタエ人など、すべての東洋人は、われわれの支配者アロンよりもあなた [カール] を一層恐れています」と述べさせている部分からも容易に読み取れる。

ノトケルスの記述は、われわれの知らない同時代史料に基づいたものであるとは考えにくく、『フランク王国年代記』やアインハルトの『カール大帝伝』の情報を核としつつ、細部を「創作」することで作成されたものと見なすことができる⁽¹⁰⁸⁾。ノトケルスが細部をいかなる資料に基づいて「創作」したのかは必ずしも明らかになっていないが、すでに関係者すべてがこの世を去って久しい時期における執筆故、大胆な「創作」が可能となったのであろう。100年も経たないうちに、カール大帝および彼の東方との関係はもはや実像と完全に分かれたものになってしまっているのである。

その後、カール大帝と東方の関係に関する「神話化」はさらに進み、10世紀以降カールは実際にエルサレムに巡礼ないし遠征を行った「十字軍士」として記憶されていく⁽¹⁰⁹⁾。そして、カールがエルサレムの支配権を獲得していたという考えは、近代歴史学成立後も消え去ることはなく、19世紀～20世紀初頭には、中東に対する植民地主義・帝国主義的拡張政策においても援用されることとなる⁽¹¹⁰⁾。カール死後に進んでいった「神話化」の産物と近代における時代錯誤的歴史像が共犯関係となって生まれた「カールによるエルサレム獲得」が完全に否定されるのは、20世紀後半のことである。

おわりに

本稿ではまず、カール大帝時代のフランク王国がバグダードを中心とする流通経済のネットワークの中では「周縁」に位置していたにすぎず、王国内の経済規模の面でも同時代の世界帝国とは比較にならないほど小規模なものにとどまっていたこ

とを確認し、次いで、邦語・外国語を問わず従来の歴史叙述においては、フランク王国がビザンツやアッパース朝と対等な立場で外交的やりとりをしていたかのように描き出されていた様子を明らかにした。

第3章では、フランク王国とアッパース朝の間の使節交換について、一次史料をも用いて分析を行い、外交交渉が「軍事同盟」を目的とするものであったという説に疑問を呈するとともに、アッパース朝からの贈り物がフランク側に強い印象を残したのに対し、アッパース朝にとってはフランクとの使節交換はそれほど重要な出来事とはみなされていなかった可能性を指摘した。従来の歴史叙述においては、カールとラシードが対等な立場で交渉を行っていたかのように描かれるのが常であったが、そうした見方は大きく修正される必要がある。

本稿を通じて著者が主張したいのは、西欧中心主義的世界史像から脱却し、8－9世紀の世界の中にカール大帝とフランク王国を正しく位置付けなおす作業の重要性である。そうした作業の障害となっていたのが、カール大帝を過度に偉大視する歴史像であった。第3章の末尾では、カール大帝のアッパース朝との使節交換の記憶が「神話化」していく過程を概観し、神話化された歴史像が近代歴史学の成立後にまで大きな影響力を有していたことを指摘したが、「カール大帝」に関していえば、「神話化」はこのトピック以外でも様々な領域で生じていたことが想定される⁽¹¹¹⁾。そして、現代の歴史書に見られるカール大帝に関する叙述も、知らず知らずのうちにそうした「神話化」を経たイメージの影響を受けてしまっていたように思われるのである。こうしたことを象徴的に示すのが、「カール大帝」として提示される図版が、多くの場合、14世紀に制作された金の胸像か、デューラーによる16世紀初頭の肖像画だという事実である⁽¹¹²⁾。完全な「神話化」の産物であるこうしたイメージがカール大帝やフランク王国を扱う書物の表紙に描かれていることほど、われわれのカール大帝イメージが「神話化」された歴史像にとらわれ続けていることを物語るものはないだろう。

最後に、今後の展望と、西欧史家の責任についても述べておきたい。フランク・ビザンツ関係史を除くと、これまでフランク王国の対外関係に関する研究は、そのほとんどが西欧史家（フランク史家）の手によるものであり、その叙述の多くは西欧中心主義と「カール大帝」への過大評価のもとにあったように思われる。他方で、イスラーム史家が8－9世紀についての叙述を行う際に、カール大帝やフランク王国が言及されることは極めて稀であった⁽¹¹³⁾。当時のイスラーム世界の史料においてカール大帝やフランク王国への言及がほとんど見られないことを考えるなら、こうした態度は同時代の世界認識のあり方と完全に合致しているものであり、イスラーム史家によるこうした歴史叙述は何らの責めを負うべきものではない。イスラーム史家にとってみれば、本稿が指摘したようなフランク王国の周縁性など、取り立てて述べる必要もないような常識に属することなのかもしれない。いずれにしても、

バグダードを中心とした8-9世紀のアフロ西ユーラシア世界の中にフランク王国を正しく位置づける作業は、西欧史家が担うべきなのである。

また、近年において西欧初期中世の国制が叙述される際に、それらが多くの場合ポジティブな言葉で表現される傾向がある点も指摘しておきたい。例えば、「場当たりの」、「非明文的」、「非合理的」で「未発達」のように見える統治システムは、「柔軟で」「独自の秩序をもった」仕組みであったと語られる。著者は、従来の「中世西欧暗黒時代」説へのアンチテーゼとしての、また、価値判断を避けて事象を叙述しようとする態度としてのこうした語りの意義を否定するものではないが、同時代の世界の諸政体における統治システムのありようと比較する場合、西欧の「後進性」は否定できないのではないだろうか。西欧史家は、ビザンツ帝国史やイスラム史、さらには同時代の中国史や日本史の研究成果からも多くを学んだうえで、表面上の類似点の探索に終始するのではなく、自分たち自身の研究対象が周縁的であり後進的である可能性にも正面から向き合ったうえで、歴史叙述を行っていくべきだろう。そうした作業を経て、自分たちが生み出してきた西欧中心主義的歴史像を書き換えていくことこそが、グローバル・ヒストリーの時代の西欧史家の任務なのである。

補論：わが国における世界史教育と西欧中心主義

本稿では、西欧中心主義的歴史像からの脱却と、アフロ西ユーラシア世界の中にカール大帝とフランク王国を正しく位置付け直す作業の重要性を繰り返し指摘してきた。ここではまず、こうした作業を行う際に、わが国の高校生が用いている世界史の教科書や資料集が大いに役に立つということを指摘したい。

わが国の高等学校で必修とされている「世界史」⁽¹¹⁴⁾においては、先史時代から現代までの世界全体の歴史が対象となっており、特にアジア優位の時代であった前近代の「世界史」がカリキュラムに含まれていることにより、「世界史」は西欧中心主義的歴史像の相対化を実現できるような作りとなっている。また、いわゆるグローバル・ヒストリーの手法を思わせるような、世界全体のつながりを強く意識させるような頁が多数用意されていることも注目し値する⁽¹¹⁵⁾。こうした傾向は、多くの高校生が教科書とともに配付されるであろう資料集においてより顕著なものとなる。例えば本稿で何度か言及した山川出版社の『詳説世界史図録』には、「同時代の世界」という見出しのもとで、各時代の「世界」の地図が、多くの図版とともに掲載されている。例えば、カール大帝時代の世界の有り様を知りたいければ、「8世紀の世界」の頁を見れば、その時期の中央アジアや東アジアの状況が一目で分かるようになっているのである。この『図録』の「8世紀の世界」の頁には、本稿第1章で言及した8世紀の世界の都市を比較する図も掲載されており、この部分を見ることで学習者は、カール大帝の「都」たるアーヘンが、同時代の世界帝国の首都

とは比べものにならないほど小規模だったことを知ることができる。ここで強調したいのは、「世界史」が必修科目であるおかげで、わが国で高等学校を卒業したものの全員が、こうした世界的な視点で歴史を観察するための格好の資料を手に入れているという事実である。こうした資料が歴史関係の各種概説書や啓蒙書にはほぼ見られないことを考えるなら、世界史の教科書や資料集の重要性は一般に考えられている以上に大きなものであると思われる。また、欧州の中等教育（日本でいう中学校・高等学校）においては、自国史を中心としたヨーロッパ史しか教えられておらず、「世界史」にあたる科目自体存在しないのであり、わが国のカリキュラムは、人々の歴史認識の「グローバル化」という点で、諸外国と比べても大きな利点を有していると言つて良いだろう。

惜しむらくは、こうした優れたカリキュラムが、2022年以降失われてしまうということである。周知のとおり、2022年から高等学校の歴史教育においては、これまでの「世界史A」ないし「世界史B」を必修とする体制から、近現代史のみからなる「歴史総合」を必修とする形へと大転換がはかられることが決定している。そして、ダイジェスト的にはあれ前近代をも扱っていた「世界史A」と異なり、「歴史総合」においては前近代に関する記述が皆無となることも確定してしまったのである⁽¹¹⁶⁾。このことは、新たに設けられる「世界史探究」を選択する者以外、高校生が前近代の世界史に触れることができなくなってしまうことを意味している。そして、現状から考えて、「世界史探究」を履修する高校生の割合は相当程度低くなることが予想されるため、ほとんどの高校生は前近代の世界史を学ばないという状況が生じてしまうのである。当然のことながら、先に示したような「グローバル」に「世界史」を学ぶことができる教科書や資料集などは「歴史探究」選択者以外の手には渡らなくなり、大多数の高校生には近現代史のみを対象にした「歴史総合」の教科書と資料集のみが配付されることとなろう。確かに「歴史総合」は最新の学説や教育理論を取り込んだ相当程度画期的なものになるかのように宣伝されており、グローバル・ヒストリーや「西欧中心主義的歴史像からの脱却」という点をも強調する内容になるとの話も聞こえてくる。だが結局の所、近現代史が「ヨーロッパ（及びヨーロッパ的価値観）が世界に広がっていく歴史」であることは動かしようのない事実なのであり、どのような視点に立つにせよ近現代史だけを扱う場合、西欧中心主義の呪縛からは逃れられないのではないだろうか。それに対して、前近代史はそれ自体が「近代」へのアンチテーゼとなりうる領域であり、ダイジェスト的にはあれ前近代を学ぶことそれ自体、「西欧中心主義」および「近代」の相対化につながる営みである。前近代世界史を完全に廃した「歴史総合」の必修化は、わが国一般における歴史像が西欧中心主義へと回帰していく大きなきっかけになりかねない⁽¹¹⁷⁾。

こうした状況下で、わが国の大多数の人々が前近代の世界史に触れる最後の機会

として残るのが、中学社会科における「歴史分野」である。現行の学習指導要領における中学社会歴史分野は日本史中心の構成となっており、教科書においても前近代外国史の扱いは極めて小さなものに留まっている。だが、今後はその教科書にして10頁前後の部分が、わが国に暮らす人々に対する前近代世界史教育のすべてを担う状況が生じるのである⁽¹¹⁸⁾。

ところが、現在用いられている中学校の歴史教科書では、前近代の世界史、特に西洋史の記述は、日本史の流れと直接関係しないこともあり、完全に「浮いた」存在となってしまっている。また、前近代の西洋史分野として大きく扱われているのは、古代ローマ帝国、ルネサンス・宗教改革・大航海時代といった華々しい時代であり、それらは多くのきらびやかな図版とともに示されていて、「ヨーロッパは常に世界の最先端を走っていた」かのような印象すらも生まれかねない作りとなっている。西洋世界が世界史的視野で見ると「極西の辺境」にすぎなかった時代にあたる「中世」（5～15世紀頃）は、ルネサンス・宗教改革と同じ見開きの中で小さく扱われているため、中学校歴史教科書において、「中世」がアジア優位の時代であったということを読み取ることは極めて困難である。むしろ、中世～ルネサンス～宗教改革～大航海時代が4～6頁程度でダイジェスト的に扱われた直後に、日本への「鉄砲伝来」の単元が配置されているため、前近代史においてもヨーロッパの先進性だけが大いに強調されるようなストーリーができあがってしまっている。現行の中学校社会科歴史分野は、日本史中心の構成でありながらも西欧中心主義の歴史像の影響を免れてはいないといえよう。そして、「平成29年告示中学校学習指導要領」をみる限り、この状況は2020年採択予定の新たな中学歴史教科書でも大きく変わることはなさそうである。

ではどうすれば良いのか。繰り返すが、著者は前近代世界史を教えることが、西欧中心主義の相対化を果たすためのもっとも良い方策であると考えているものである。だが、当然のことながら、現状を考えるなら中学校の「歴史」の授業において、前近代の世界史をすべて教えることは現実的ではない⁽¹¹⁹⁾。となれば、考えられるのは、ある時期に焦点をあてて、「静止画的に」世界全体を見渡すような単元をもうけることだろう⁽¹²⁰⁾。そして、本特集が扱う8・9世紀は、西欧とそれ以外の地域のコントラストがもっともよくあらわれるという点で、西欧中心主義の相対化という目的にもっとも合致する時期の一つであると思われるのである。8・9世紀は、日本史においても、中国に倣って律令体制が導入された時期として比較的手厚く学ばれる時代に当たる。その際、授業の中の10分間でも良いので、『詳説世界史図録』に見られるような8世紀の世界地図を提示し、その時代のヨーロッパや中東、中央アジアの有様を伝えることができれば、日本史中心の授業においても西欧中心主義を脱するきっかけを与えることが可能になるのではないだろうか。例えばそこで本稿の第1章でも言及した「都市の比較」の図を見せるだけでも、この時代のフラン

8・9世紀アフロユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国（津田）

ク王国の経済的後進性を容易に伝えることができるし、そうした情報が伝わることで、生徒は「ではなぜ、これほど経済的に遅れていたヨーロッパが、後に日本に鉄砲を伝えたり、世界中に植民地を生み出したりことができるようになったのか」という重要な疑問を抱くであろう。8・9世紀の世界史は、西欧中心主義とカール大帝への過大評価にとらわれずに扱う場合、西欧中心主義を効果的に相対化できる可能性をもつ領域なのである。

今望まれるのは、こうした素材を用いて中学校で授業を行う際に用いることができる教材や具体的な授業案の開発であろうが、そうした作業は本稿の枠組みを大きく超えるものである。いずれにしても、現行のカリキュラムや教科書がすぐに大きく変化することが期待できない今、前近代の外国史を専門とする研究者が行うべきは、高大連携（だけ）ではなく、中学校の教育現場との連携なのだということを強く認識する必要がある。

（付記）本研究は JSPS 科学研究費19K01047, 19K02878, 19KK0014の助成を受けたものである。

本稿は諸般の事情から脱稿（2020年3月）後刊行まで約1年間の時間が経過しており、その間に日欧双方で本稿の議論にとっても重要な書籍として、三浦徹編『歴史の転換期3－750年普遍世界の鼎立』山川出版社、2020年と Erik Hermans (ed.), *A Companion to the Global Early Middleages*, Leeds, 2020. が刊行されたことを述べておきたい。特に後者に収録された Jennifer Davis による「西欧」の章は、アッバース朝とフランク王国のやりとりの非対称性への言及もあり、本稿の視角と一部重なりを持っている（同書については註4にあげた『西洋中世研究』第12号中で小澤実による紹介がある）。前者についてしかるべき評者による書評を待つこととし、ここで論評することは差し控えたい。

註

- (1) グローバル・ヒストリーの特徴については、水島司『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社、2010年、1-8頁。
- (2) 同、3頁、9-14頁。
- (3) 例えば、わが国においては、アプー＝ルゴドの著作（佐藤次高他訳『ヨーロッパ覇権以前－もう一つの世界システム』岩波書店、2001年）が邦訳される以前から、岡田英弘や杉山正明らによって、中央ユーラシアを中心に据えた「世界史」が一般層に向けて刊行されている。
- (4) グローバル・ヒストリーと称する研究のほとんどは近世以降を対象としたものであり、初期中世がグローバル・ヒストリー的に語られることは極めて稀であった。「中世」を対象としたグローバル・ヒストリーの最新の研究動向については小澤実によ

- るまとめが有益である、小澤実「中世グローバルヒストリーの潮流」、『史苑』80-2、2020年、135-166頁；『西洋中世研究』第12号、2020年、158-159頁（小澤による3冊の欧文献の紹介）。
- (5) 全国歴史教育研究協議会編『世界史用語集』山川出版社、2014年によると、「カール大帝」、「フランク王国」、「カールの戴冠」はすべて頻度「7」（全7段階）で、すべての教科書で言及される用語となっている。また、高大連携歴史教育研究会「高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案（第一次）」（2017年10月）においても、「カール大帝」及び「フランク王国」は削減対象とはされていない。木村靖二他『詳説世界史改訂版—世界史B』山川出版社、2018年ではカール大帝は「カール大帝騎馬像」の写真とともに掲載されており（125頁）、木畑洋一他『新版世界史A』実教出版株式会社、2018年でもカール大帝は写真付での掲載となっている（54頁）。『最新世界史図説タペストリー17訂版』帝国書院、2019年では、「8～9世紀の世界」と題する世界地図の頁（22-23頁）においてカール大帝は、玄宗、ハールーン・アッラシードと並んで写真付で掲載されており、『第2版詳説世界史図録』山川出版社、2017年の「同時代の世界—8世紀の世界」の頁（64-65頁）においても、見開きの左上部分は「カロリング朝の成立」及び「カール大帝（胸像）」の図版・キャプションが占めている。著者は、カール大帝の後代における評価を考えるのであれば、こうした大きな取り扱いは必ずしも不適切なものではないと考える。他方で、こうした取り扱いが、カール大帝の同時代における位置づけを正しく反映したものではないという点を見落としてはならない。
- (6) M. Borgolte, Karl der Große – Sein Platz in der Globalgeschichte, *Saeculum. Jahrbuch für Universalgeschichte* 63, 2013, pp. 167–188; B. Segelken and T. Urban, Karl der Große als Akteur im Mittelmeerraum, Stiftung Deutsches Historisches Museum (ed.), *Kaiser und Kalifen. Karl der Große und die Mächte am Mittelmeer um 800*, Darmstadt, 2014, pp. 10–13; M. Borgolte, Karl der Große. Ein Global Player? *ibid.*, pp. 16–23.
- (7) アンリ・ピレンス（増田四郎監修、中村宏・佐々木克己訳）『ヨーロッパ世界の誕生—マホメットとシャルルマーニュ—』創文社、1960年。
- (8) ピレンステータゼおよびその批判的再検討に関する文献は極めて多数に上るが、基本的な論点は、H・ピレンス他（佐々木克己編訳）『古代から中世へ—ピレンス学説とその検討』、創文社、1975で把握することができる。
- (9) パミラ・カイル・クロスリー（佐藤彰一訳）『グローバル・ヒストリーとは何か』岩波書店、2012年の第5章「システム」（123-150頁）では、「中世ヨーロッパ」の成立を徹底的な外因説に基づいて説くピレンステータゼが、ヨーロッパ中心主義を見直す方向性をもつ研究史の出発点として位置づけられている（特に127-130頁）。
- (10) 家島彦一『イスラム世界の成立と国際商業—国際商業ネットワークの変動を中心に—』岩波書店、1991年。一般向けの書物としては宮崎正勝『イスラム・ネットワー

- 8・9世紀アフロ西ユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国（津田）
クアッパース朝がつけた世界』講談社選書メチエ、1994年もある。
- (11) 佐藤彰一『中世世界とは何か』岩波書店、2008年、12-17頁；同『カール大帝』山川世界史リブレット人、2013年、89-94頁。
- (12) ここまでにあげてきた文献以外では、鶴島博和「ヨーロッパ形成期におけるイングランドと環海峽世界の『構造』と展開」、『史苑』75-2、5-108頁、特に65-67頁；服部良久他編著『大学で学ぶ西洋史 [古代・中世]』ミネルヴァ書房、2006年、175-176頁；小澤実「キエフ・ルーシ形成期の北西ユーラシア世界とスカンディナヴィアールーン石碑の検討を中心に」、小澤実・長縄宣博編著『北西ユーラシアの歴史空間—前近代ロシアと周辺世界』北海道大学出版会、2016年、75-103頁、特に80-81頁。
- (13) 西欧における市場経済の活況を強調するものとしては例えば、丹下栄「西欧中世初期社会の流通構造—パリ周辺地域を中心に」、佐藤彰一・早川良弥編著『西欧中世史—上』ミネルヴァ書房、1995年、167-190頁を挙げることができる。こうした動向については、佐藤彰一他編『西洋中世史研究入門増補改訂版』名古屋大学出版会、2005年、150-154頁。
- (14) 佐藤彰一は、クリス・ウィッカムを引きつつ、中世西欧が西ローマ帝国崩壊後「中心」の座から滑り落ち、東地中海世界を「中心」とするシステムの「周縁」におかれたという点を強調しているし（佐藤彰一『中世世界とは何か』、13頁）、鶴島博和もキリスト教「西方」が8世紀以降「バグダッド・コンスタンティノーブル枢軸」に対する後進地帯として位置づけられていくと述べている（「イングランド—ヨーロッパ形成期におけるその位置と構造—」『岩波講座世界歴史8ヨーロッパの成長』岩波書店、1998年、229頁）。
- (15) Johannes Preiser-Kapeller, *Jenseits von Rom und Karl dem Großen*, Wien - Berlin, 2018.
- (16) *Ibid.*, p. 8.
- (17) 例えば、五十嵐修『地上の夢』講談社選書メチエ、2001年、149-150頁；佐藤彰一『カール大帝』、58-59頁。
- (18) Preiser-Kapeller, *Jenseits von Rom und Karl dem Großen*, pp. 8-10.
- (19) 『第2版詳説世界史図録』、64-65頁。ただし、アーヘンのみ他の諸都市と異なる縮尺で掲載されているため、一見すると他の大都市と同程度の大きさのように見えてしまう点には注意が必要である。また、掲載されている市壁は中世盛期のものであり、8世紀の市域を示すわけではない。
- (20) 周知のとおりフランク王国は巡幸王権であったため、アーヘンを「都」と呼ぶことができるかどうかは意見が分かれるところであろう。ただし、カールがその治世の末期にアーヘンにとどまり続けたことや、アーヘンの王宮が当時アルプス以北で最大規模のものであったことを考えるなら、一定の留保付きで「都」と称することは可能であると思われる。この点については、五十嵐修『地上の夢』、120-135頁。

- (21) 『岩波講座世界歴史7 中世1 中世ヨーロッパ世界1』 岩波書店、1969年。
- (22) 『岩波講座世界歴史8 中世2 西アジア世界』 岩波書店、1969年。
- (23) 『岩波講座世界歴史7 中世1 中世ヨーロッパ世界1』、97-122頁。
- (24) 全12章の内、フランク王国を主たる対象としない章は、弓削達「末期ローマ帝国の体制」、田中正義「アングロサクソンの社会とその封建化」、米田治泰「ビザンツ世界の国家と経済」のみである。
- (25) 同153-244頁。
- (26) 同153頁。
- (27) 『岩波講座世界歴史7 ヨーロッパの誕生4—10世紀』 岩波書店、1998年。
- (28) 同213-240頁。
- (29) 同109-130頁。
- (30) 『岩波講座世界歴史10 イスラーム世界の発展7—16世紀』 岩波書店、1999年、71-95頁。
- (31) 同71頁。
- (32) ミシェル・パストゥロー（松村恵理・松村剛訳）「カール大帝の象アブル・アバス（800—810年頃）」、同『王を殺した豚 王が愛した象—歴史に名高い動物たち』 筑摩書房、2003年、98-104頁（原書2001年）。
- (33) 本稿第3章を参照。
- (34) Stiftung Deutsches Historisches Museum, *Kaiser und Kalifen*.
- (35) ただし、本書がカールの「神話化」をトピックの一つとして取り上げており、後代におけるカール大帝の評価を扱う論考4点も収録していることは注目に値する。巻頭論文（Segelken and Urban, Karl der Große als Akteur im Mittelmeerraum, *ibid.*, pp. 10-13）は極めて正当に「1200年間の神話化・伝説化が、カールの歴史的人格や実際の業績を多様な形で覆い隠している」（p. 11）と指摘する。ただし、本書における同時代のカールを扱う諸章において、この点は必ずしも十分に意識されているわけではないように見える。
- (36) ここでは取り上げないが、イスラーム古銭学者 Lutz Ilisch によるイスラーム圏とフランク王国の交易関係に関する論考も本稿の問題関心と一部関係する知見を提示している。L. Ilisch, Geldgeschichten. Handel zwischen islamischem und karolingischem Reich, *ibid.*, pp. 144-155.
- (37) Borgolte, Karl der Große. Ein Global Player?, *ibid.*, pp. 16-23.
- (38) *Ibid.*, p. 23.
- (39) W. Drews, Karl, Byzanz und die Mächte des Islam, *ibid.*, pp. 87-99.
- (40) *Ibid.*, p. 87.
- (41) *Ibid.*, pp. 98f.
- (42) D. G. Tor (ed.), *The 'Abbasid and Carolingian Empires. Comparative Studies in*

- 8・9世紀アフロ西ユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国（津田）
Civilizational Formation, Leiden, 2018.
- (43) D. G. Tor, Introduction. The 'Abbasid and Carolingian Dynasties in Comparative Perspective, *ibid.* pp. 3-11.
- (44) 唯一、宮廷文化に言及する部分でのみ、アッバース朝宮廷のほうが大規模であったことが付随的に言及されている、*ibid.*, p. 7.
- (45) *Ibid.*, p. 5, n. 8.
- (46) J. Fried, *Fernes Byzanz und noch fernerer Dâr al-Islâm*, idem, *Karl der Große. Gewalt und Glaube*, München, 2013, pp. 97-109, 特に pp. 108f.
- (47) D. Barthélémy et M. Sot (eds.), *L'Islam au carrefour des civilisations médiévales*, Paris, 2012.
- (48) Johannes Preiser-Kapeller, *Jenseits von Rom und Karl dem Großen*.
- (49) 本書の内容については、佐藤彰一による「新刊紹介」がある、『西欧中世研究』11、2019年、186-187頁。
- (50) S. Esders über Preiser-Kapeller, Johannes: *Jenseits von Rom und Karl dem Großen. Aspekte der globalen Verflechtung in der langen Spätantike, 300-800 n. Chr.*, Wien 2018, H-Soz-Kult 05.04.2019 <www.hsozkult.de/publicationreview/id/reb-27511> (2020年3月27日閲覧).
- (51) 著者の知る限り、邦語で読めるこの使節交換についてのもっとも詳細な記述は佐藤彰一『カール大帝』42-45頁である。佐藤はボルゴルテヤマコーミクの最新の研究を引きつつ、フランク・アッバース朝間のやりとりについて、その世界史的意義にまで踏み込んだ記述を行っている。ただし、768年に使節を派遣したアッバース朝カリフをハールーン・アッラシードと記載していることは単なるミスとしても（実際にはマンスール）、「カールは802年にカリフ、ハールーンに象一頭の寄贈の要求をし、『アブー・アッバス』と名づけられた象が、莫大な贈り物とともにバグダードから届けられたが…」という記述は大きな誤解を含んでいる。象の寄贈がカールの要求に従ったものなのかについて先行研究の意見は分かれており、仮にカールが象を所望していたとしても、それは802年ではあり得ない（802年は象がアーヘンに到着した年である）。「カールの要求が即座にかなえられた」かのような叙述は、アインハルト『カール大帝伝』の記述内容を思わせるものだが、後述するようにこの部分のアインハルトの記述は、より信憑性の高い『フランク王国年代記』が伝える情報とは食い違っている。
- (52) このテーマについての研究は19世紀以来活発に行われてきたが、包括的研究として M. Borgolte, *Der Gesandtenaustausch der Karolinger mit den Abbasiden und mit den Patriarchen von Jerusalem*, München, 1976が1つの到達点として位置づけられるべきである。それ以前の研究については *ibid.*, pp. 3-17. 近年のものとしては、P. Sénac, *Le monde carolingien et l'islam : contribution à l'étude des relations diplomatiques*

- pendant le haut Moyen âge, VIIIe-Xe siècles*, Paris, 2006; A. T. Hack, *Abul Abaz zur Biographie eines Elefanten*, Badenweiler, 2011. 先に言及したフリートの伝記的研究も、カールとラシードの間の使節交換に一定の紙幅を裂いている、Fried, *Karl der Große*, pp. 464-469, pp. 509-516.
- (53) B. Kursch, *Fredegarii et aliorum chronica, MGH Scriptores rerum merovingicarum 2*, Hannover, 1888. この史料については、Art. *Chronicarum libri IV, Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters* (<https://www.geschichtsquellen.de/werk/2355>) (2020年3月18日閲覧)。また、津田拓郎「トゥール・ポワティエ間の戦いの『神話化』と8世紀フランク王国における対外認識」『西洋史学』261, 1-20頁, 3頁註6でも本史料の成立事情について扱っている。
- (54) Krusch, *Fredegarii et aliorum chronica*, c. 51, pp. 191f. 「…以前にサラセン人たちの王アモルムニに送っておいた使節らが、3年たった今マルセイユに戻ったという知らせが王に届いた。彼らは、多くの贈り物を持ったそのサラセン人の王アモルムニの使者をも連れてきた。このことを王が知ると、王は自分の使節を彼のもとに送った。使節は彼をうやうやしく受け入れて、冬を越すためメッスのキヴィタスまで同行することとなっていた。…(国内の敵対者との戦いの話題)…。王はそこからシャントソーの王妃のもとへと来て、冬を越すようにとメッスへ送っていたサラセン人の使節を、自分のいるシャントソーの城砦へと来させた。サラセン人らは、アモルムニが持たせていた贈り物をそこで提示した。さらに王は、自分のもとに来たサラセン人らに贈り物を与え、マルセイユまで敬意を持って送らせた。サラセン人たちは船の通行証により海路で故郷へ戻った」。以下本稿では、MGH版からの史料引用に際して引用部分が一定分量を超える場合、煩を避けるためラテン語原文の記載を省略することとする(MGH版の史料はすべてdmgh.deで無料で閲覧可能となっている)。王の名前のごとくにあらわれる「アモルムニ」Amormuniは、カリフの称号である「アミール・アル・ムニン」(「信徒の長」)がラテン語化したものであろう。この称号については、亀谷学「ウマイヤ朝期におけるカリフの称号—銘文・碑文・パピルス文書からの再検討」『日本中東学会年報』24-1、2008年、17-43頁;同「研究フォーラム：初期イスラーム時代におけるカリフ概念の形成—同時代史料に見られるカリフ称号からの再検討」『歴史と地理—世界史の研究』659、2012年、47-50頁。この使節交換については註52であげた文献に加えて、M. McCormick, *Pippin III, the embassy of Caliph al Mansur, and the Mediterranean world*, M. Becher and J. Jarnut (eds.), *Der Dynastiewechsel von 751. Vorgeschichte, Legitimationsstrategien und Erinnerung*, Münster, 2004, S. 221-241も参照。
- (55) F. Kurze, *Annales regni Francorum inde ab a. 741 usque ad a. 829, qui dicuntur Annales Laurissenses maiores et Einhardi, MGH Scriptores rerum Germanicarum 6*, Hannover, 1895. この史料についての研究は多数存在するが、さしあたり *Art. Annales regni*

8・9世紀アフロ西ユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国（津田）

Francorum, Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters (<https://www.geschichtsquellen.de/werk/266>) (2020年3月18日閲覧)を参照。『王国年代記』及びいわゆる『改訂版』の成立事情については現在でも意見が分かれているが、一般に本稿で取り上げる部分については、宮廷（ないしその周辺）で同時代的に執筆されたと考えられている。なお、伝統的に『改訂版』は『カール大帝伝』の著者でもあるアインハルトに帰されていたが、この説は現在では完全に否定されている。

- (56) “Aaron Amir al Mumminin regis Persarum.” 「アアロン」は「ハールーン」のこと。ここでラシードが「サラセン人」ではなく「ペルシア人」の王と称されている理由は判然としない。フリートは、伝統的にローマ皇帝の交渉相手はペルシア人であったという点をふまえ、ここに皇帝戴冠後のカールの自己意識のあらわれを見ている、Fried, *Karl der Grosse*, p. 468.
- (57) 800年に毎年の貢納支払いと引き換えにアッバース朝からの半独立的地位を獲得していたアグラブ朝のイブラーヒームのこと。ここで言及されている「フスタート」はエジプトの都市ではなく、カイラワーン近郊に建設されたアグラブ朝の首都アッパシーヤを指す、Kurze, *Annales regni Francorum*, p. 116, n. 2. アグラブ朝については、佐藤健太郎「アグラブ朝」、大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』、岩波書店、2002年、10頁。
- (58) この「ユダヤ人」イサクについては、この記述以外の情報が残されていないが、道案内兼通訳の役目を2果たしていたと考えられている、Borgolte, *Der Gesandtenaustausch*, p. 48; Sénac, *Le monde carolingien et l'islam*, p. 54; Fried, *Karl der Große*, pp. 464f.
- (59) Kurze, *Annales regni Francorum*, pp. 114-116.
- (60) *Ibid.*, p. 117.
- (61) この象の名前が意味するところについて、Hack, *Abul Abaz*, pp. 31f., pp. 62-67は、過去のさまざまな解釈をまとめたうえで、アッバース朝の設立者の名にちなんだ命名であるとの結論に至っている。
- (62) Kurze, *Annales regni Francorum*, pp. 123f.
- (63) 「彼 [ルイ敬虔帝] は...一般集会をティヨンヴィルで開催し、ペルシアからアミルアルムミニンの使節が来て、和平を求めた。彼らはすぐに望みをかなえてもらい、帰路についた」（『サンベルタン年代記』：G. Waitz (ed.), *Annales Bertiniani, MGH Scriptores rerum Germanicarum* 5, Hannover, 1883, p. 3）。「...さらにルイは秋にティヨンヴィルに民が皆集まるようにと命じた。海の彼方からこの場所にサラセン人たちの3つの使節が来た。そのうち2つはサラセン人、一つはキリスト教徒のものであった。そして彼らは故郷の大いなる贈り物を届けた。つまり、様々な種類の香料や布である。求められた和平が獲得されると、彼らは帰路についた」（天文学者『ルイ敬虔帝伝』：E. Tremp (ed.), *Thegan, Die Taten Kaiser Ludwigs/ Astronomus, Das Leben*

- Kaiser Ludwigs, MGH Scriptorum rerum Germanicarum 64*, Hannover, 1995, c. 46, p. 466)。また、『クサンテン年代記』にも簡潔な記述が見られる, B. von Simson (ed.), *Annales Xantenses et Annales Vedastini, MGH Scriptorum rerum Germanicarum 12*, Hannover, 1909, p. 8.
- (64) 近年でも M. Sot, *Charlemagne et Hārūn al-Rachīd. Premières recontres entre monde musulman et Occident chrétien (VIIe-IXe siècle)*, Barthélémy and Sot (eds.), *L'Islam au carrefour des civilisations médiévales*, pp. 27-42, pp. 35f.; P. E. Dutton, *Charlemagne's mustache and other cultural culusters of a dark age*, New York, 2004, pp. 60f.; Fried, *Karl der Große*, pp. 465f.; Sénac, *Le monde carolingien et l'islam*, pp. 56-69.
- (65) Drews, Karl, *Byzanz und die Mächte des Islam*, pp. 92f. は、両宮廷間の使節交換の背景に対ビザンツという要素が存在した事を認めつつも、軍事同盟としての性質よりも、後述するエルサレムへの支援を通じたカールの普遍的君主としての地位の明示という要素のほうを強調する。
- (66) ただし、本稿が行ってきたように『フランク王国年代記』中の使節交換に関する情報のみを抜き出すのではなく、当該情報が年代記中のどのような文脈の中で記載されているのかという点から何らかの情報を引き出すことができる可能性はあろう。例えば Dutton, *Charlemagne's mustache*, p. 61は、801年のカールによるバルセロナ獲得の情報が、東方からの使節到着の情報に挟まれて配置されていることを強調する。また、806年の使節到着の部分でわざわざ「敵」と称されるビザンツの艦隊の存在が強調されている点も、年代記作者が東西使節交換における対ビザンツ的要素をほのめかしていると解釈できるかもしれない。もっとも、こうした情報はすべてフランク宮廷側の認識を示しているにすぎず、アッバース朝側が同様の認識を抱いていたことの証拠とはならないという点は忘れてはならない。
- (67) 例えば、この時期にはすでに、北アフリカにはアグラブ朝やイドリース朝といった半独立的勢力が成立しており、後ウマイヤ朝はアッバース朝にとって直接国境を接する「敵」ではなくなっていた、Drews, Karl, *Byzanz und die Mächte des Islam*, pp. 92f. and p. 367, n. 54。「軍事同盟」説を提唱する歴史家は、801年にアグラブ朝の使節もカールと対面している点から「対後ウマイヤ朝」的要素を強調する場合もあるが、当時のアグラブ朝を単純に「親アッバース朝=親フランク=反後ウマイヤ朝」と理解して、フランクと共同での後ウマイヤ朝に対する「挟み撃ち」のような軍事作戦を想定することが妥当であるとは思えない。いずれにしても、フランク史家としての業績しか持たない著者もまた「フランク外の動向への無知」とのそしりからは逃れられないのであり、ここで早急にこの問題に関する結論を出すことは差し控えた。
- (68) Sénac, *Le monde carolingien et l'islam*, pp. 59-61. ドレウスは、エルサレム教会への介入の背景に、自身のキリスト教的君主としての普遍的な地位を強調する狙いを見て

8・9世紀アフロ西ユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国（津田）

いる、Drews, Karl, *Byzanz und die Mächte des Islam*, pp. 90f., pp. 93f. and p. 98. この論点は、佐藤彰一『カール大帝』43-45頁でも扱われている。

- (69) Kurze, *Annales regni Francorum*, pp. 108f., 112f. また、『フランク王国年代記』には記載が見られないが、803年にもエルサレムからの使節がカールのもとを訪れたことが知られている、Borgolte, *Der Gesandtenaustausch*, pp. 83-86.
- (70) 当時の聖地の状況については、Borgolte, *Der Gesandtenaustausch*, pp. 17-34; K. Bieberstein, *Der Gesandtenaustausch zwischen Karl dem Großen und Hārūn ar-Rašīd und seine Bedeutung für die Kirchen Jerusalems*, *Zeitschrift des Deutschen Palästina-Vereins*, 109-2, 1993, pp. 152-173. また、エルサレム総主教がイコノクラスムの時期にビザンツと対立関係にあり、聖画像崇敬が復活した時期においてもビザンツとの連携に成功していなかったという点も考慮する必要がある。
- (71) ボルゴルテによると、エルサレムからアーヘンまでは半年ほどの旅程であり、3月の出来事を商人や巡礼者を通じてカールが知ったうえで使節を派遣した可能性が指摘されている、Borgolte, *Der Gesandtenaustausch*, pp. 53f. Bieberstein, *Der Gesandtenaustausch zwischen Karl dem Großen und Hārūn ar-Rašīd*, pp. 163-165も参照。
- (72) M. McCormick, *Charlemagne's survey of the Holy Land : wealth, personnel, and buildings of a Mediterranean church between antiquity and the Middle Ages : with a critical edition and translation of the original text*, Washington DC, 2011.
- (73) A. Boretius (ed.), *MGH Capitularia regum Francorum I*, Hannover, 1883, no. 64, c. 18, p. 154. その他の証拠については、Borgolte, *Der Gesandtenaustausch*, pp. 92-101; Bieberstein, *Der Gesandtenaustausch zwischen Karl dem Großen und Hārūn ar-Rašīd*.
- (74) Hack, *Abul Abaz*, pp. 28f.
- (75) Borgolte, *Der Gesandtenaustausch*, p. 121. こうした見解は、佐藤彰一『カール大帝』、44-45頁でも紹介されている。
- (76) A. M. Schilling, *Karl der Große in der arabischen Historiographie: Eine Spurensuche*, B. Bastert, *Karl der Große in den europäischen Literaturen des Mittelalters. Konstruktion eines Mythos*, Tübingen, 2004, pp. 201-222, p. 201. かつてはこうしたことを理由に、フランク-アッバース朝間の使節交換自体の虚構性が主張されたこともあったが、現在では使節のやりとりがあったことを疑う研究者はいない、Borgolte, *Der Gesandtenaustausch*, pp. 3f.; Hack, *Abul Abaz*, S. 18, n. 15.
- (77) Bieberstein, *Der Gesandtenaustausch zwischen Karl dem Großen und Hārūn ar-Rašīd*, p. 153は、フランク-アッバース朝間の使節交換がエルサレム教会にとって大きな重要性を有していたことを強調しつつも、アッバース朝にとってはカロリング朝とのやりとりは重要ではなかったと述べる。Drews, Karl, *Byzanz und die Mächte des Islam*, pp. 87f. も、ビザンツとのやりとりがアラビア語史料に一定数現れるのとは対照的に、フランクとのやりとりが史料に現れないことを指摘し、「カールは地中海

の諸権力との関係を結んだが、相手方からは、もっぱら遠くの野蛮な君主の一人とみなされていた」と指摘する。

- (78) Schilling, *Karl der Große in der arabischen Historiographie* を見る限り、アラビア語史料におけるカール大帝への言及のほとんどは8世紀後半におけるスペイン遠征に関わるものである。カール大帝への言及の初出は10世紀のマスウーディによる『黄金の牧場』であり、ここではカールの名と在位年数のみがやや不正確に言及されているにすぎない。その情報源としてマスウーディは、ヘローナ司教 Godmar の『フランク人の歴史』をあげている。シリングの研究を見る限り、カール及びそのスペイン遠征の情報が同時代にもアッバース朝の領域にまで広がっていたとは考えにくい。なお、Fried, *Karl der Große*, p. 465; Drews, *Karl, Byzanz und die Mächte des Islam*, p. 94や Ilisch, *Geldgeschichten*, pp. 150f. は、アグラブ朝成立直前に北アフリカを治めていたムハンマド・アル・アッキが「北の暴君」と武器や金属をやりとりしていたとの内容をもつアラビア語史料を挙げ、この「北の暴君」がカール大帝を指す可能性を指摘している。現状著者には、この解釈の妥当性を評価する能力がないが、上述の『フランク王国年代記』の記述に加え、古銭学の分野からも、カール大帝時代に北アフリカとフランク王国の間に通商関係が存在したことが明らかにされていることもあわせて考えるなら、一定の説得力を持つといえるかもしれない。ただし、仮にこれがカール大帝のことだとしても、ここでの言及のされ方が極めて曖昧なものにとどまっていること自体が、当時の世界におけるカールの位置づけを物語っているといえる。
- (79) Sot, *Charlemagne et Hārūn al-Rachīd*, p. 42.
- (80) Hack, *Abul Abaz*, pp. 20f.
- (81) Sénac, *Le monde carolingien et l'islam*, pp. 43f.
- (82) A. V. Popovkin (ed.), *The History of al-Tabarī. XL Index*, New York, 2007, p. 231によると、タバリーの著作中の「フランク人」(al-Ifranjah)への言及は1箇所のみ存在するが、そこで言及されているのはおそらく西ゴート人である、R. S. Humphreys (trans.), *The History of al-Tabarī. XV. The Crisis of the Early Caliphate*, New York, 1990, p. 22. 確かにタバリーの著作は、『フランク王国年代記』のような宮廷(ないしその周辺)で記載された「公の」史料ではないため、そのことから宮廷への使節到来が言及されないとの説明が可能となるかもしれない。だが、セナックも指摘するとおり(Sénac, *Le monde carolingien et l'islam*, 43f.)、タバリーはビザンツとの使節交換についてはしっかりと言及している。
- (83) A. V. Popovkin (ed.) *The History of al-Tabarī. XL Index* から概観を得ることができる。
- (84) 例えば、イブン・フルダーズベの『諸道と諸国の書』に見られるユダヤ人商人の活動範囲の記述では、「フランク王国」が言及されており、イスラーム世界で「フランク王国」の存在が全く知られていなかったわけではないことが明らかになる(こ

8・9世紀アフロ西ユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国（津田）

の部分の抄訳は、宮崎正勝『イスラム・ネットワーク』、122-124頁で読むことができる。他方で、イブン・アル＝ファキーフ・アル＝ハマザーニーが伝える、バグダード建設時の逸話（バグダードのもつ地の利が語られる部分における世界の描写）においては、フランク王国は言及されていない、家島彦一『イスラム世界の成立と国際商業』、213-214頁。

- (85) 「カールは…バグダードのカリフにたいして、あたかも朝貢をなすべきかのような態度で接している。カールの脳裏において、イスラーム圏は、ヨーロッパの東片の地にあり、いずれ自らの軍門にくだる土地と認識されていたのであろうか」。佐藤彰一『カール大帝』、3-4頁。
- (86) 佐藤はバグダードの中心性と西欧の周縁性を正当に強調するなど（本稿第1章を参照）、世界史的な視野をもって西欧中心主義の相対化を推し進めている数少ない初期中世西欧史家の一人であり、一般向けの書物における前註の引用部は、やや「筆が滑った」記述と見なすべきなのかもしれない。
- (87) 著者はかつて、トゥール・ポワティエ間の戦いとその記憶の「神話化」を分析するなかで、カールの祖父カール・マルテルが当時の西ユーラシア世界の情勢をほとんど把握できていなかったのに対し、カール大帝時代になるとフランク王国における世界情勢に関する情報が相当程度拡大していた可能性を指摘した、津田拓郎「トゥール・ポワティエ間の戦いの『神話化』と8世紀フランク王国における対外認識」。
- (88) ここまでで言及したもの以外では、例えば Dutton, *Charlemagne's mustache*, p. 59. こうした主張の根拠はおそらくはアインハルト『カール大帝伝』なのだろう。この問題については次節で扱う。なお、フランク王国とアッバース朝の使節交換がどちら側のイニシアチヴで始まったのかについても研究者の意見は分かれている。すでに述べたように、『フレデガリウス年代記続編』が初めてバグダードからの使節到来を伝える際に、ピピンが3年前に使節を派遣していたことに言及しているため、多くの研究者は、ピピンによる使節派遣が両王朝の外交関係の始まりであると考えている、Borgolte, *Der Gesandtenaustausch*, pp. 120f.; P. Sénac, *Charlemagne et Mahomet. En Espagne (VIIIe-IXe siècles)*, Paris, 2015, p. 268f.; Sot, *Charlemagne et Hârûn al-Rachîd*, pp. 35f. それに対してフリートは、『続編』が伝えるマンスール使節到着部分の *Iterum* を「再び」と読むことで、これが2度目のアッバース朝からの使節到着であり、ピピンが3年前に送っていた使節はアッバース朝からの第1使節への返答にあたるとの解釈を示している、Fried, *Karl der Große*, p. 108, n. 44. 『続編』が（フリートの想定する）第1使節に言及していないことの説明が一切見られないことや、*iterum* が「再び」という意味のみをもつわけではないことなど、フリート説には多くの問題があると思われる。むしろわれわれが注意すべきは、使節のやりとりがフランク史料にしかあらわれず、しかもフランク史料は基本的に自らの使節派遣時にはそれを記述せず、使節の帰還や相手方からの使節の到着にのみ言及するという傾向をも

- つ点である。こうしたことをふまえるなら、Borgolte, *Der Gesandtenaustausch*, p. 123 が指摘するように、派遣されたが目的地に到着できなかった（または到着したが帰還できなかった）使節が一定数存在した可能性もあり、両王朝間の使節交換を完全に復元することは不可能であると考えるべきであろう。
- (89) 象を海路で運ぶための船については、Hack, *Abul Abaz*, pp. 24–26.
- (90) Drews, Karl, *Byzanz und die Mächte des Islam*, p. 97.
- (91) *Ibid.*, pp. 20f. アッバース朝が外交交渉に際してしばしば珍しい動物を相手方に贈っていることも指摘されている。
- (92) 本稿 3—6 で取り上げるノトケルスによる「創作」にはカールからの返礼品として、馬やロバ、布、犬があげられている。これはおそらく歴史的事実に基づく記述ではないだろうが、フランク王国が提供できた贈り物がどの程度のものだったのかを物語っている記述と見なすことができる。ノトケルスはこの「犬」にライオンを狩らせることで、その価値を高めようと試みている。
- (93) ハックによれば、『フランク王国年代記』が象に割いている記述の量は、カールの王妃に関する記述よりも大きいとのことである、Hack, *Abul Abaz*, p. 16.
- (94) G. Pertz (ed.), *Annales et chronica aevi Carolini, MGH Scriptores I*, p. 39. この史料については、Art, *Annales Laureshamenses, Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters* (<https://www.geschichtsquellen.de/werk/309>) (2020年3月26日閲覧)。
- (95) 802年について大部分『ロルシュ年代記』の文言を用いている『モワッサク年代記』は、「そしてこの年、海の向こうペルシアにおけるサラセン人たちの王アモルムリへと、象を求めて派遣していた彼 [カール] の使節が、その象をフランキアのアーヘンの玉座へと連れてきた」と伝えている、G. Pertz (ed.), *Annales et chronica aevi Carolini, MGH Scriptores I*, Hannover 1826, p. 307; W. Kettemann, *Subsidia Anianensia. Überlieferungs- und textgeschichtliche Untersuchungen zur Geschichte Witiza-Benedikts, seines Klosters Aniane und zur sogenannten «anianischen Reform»*, Diss. Duisburg, 2000, p. 103; D. Claszen, *Chronicon Moissiacense Maius. A Carolingian World Chronicle. From Creation until the First Years of Louis the Pious. Volume II: Text Edition*, Leiden, 2012, p. 141. 『モワッサク年代記』のこの部分は、818年以降にこの年代記（またはこの年代記の原典となった失われた年代記）を編纂した人物（詳細不明）の手によると考えられており（D. Claszen, *Chronicon Moissiacense Maius. A Carolingian World Chronicle. From Creation until the First Years of Louis the Pious. Volume I: Introduction*, p. 56）、その時期にはすでにカールの使節はもっぱら「象を求めて」派遣されたものとみなされていたようである。
- (96) H. Schnorr von Carolsfeld, *Das Chronicon Laurissense breve, Neues Archiv der Gesellschaft für Ältere Deutsche Geschichtskunde zur Beförderung einer Gesamtausgabe der Quellenschriften deutscher Geschichten des Mittelalters* 36, 1911, pp. 15–39, p. 35.

8・9世紀アフロ西ユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国（津田）

- (97) この史料については、Art. *Chronicon Laurissense breve, Geschichtsquellen des Deutschen Mittelalters* (<https://www.geschichtsquellen.de/werk/1105>) (2020年3月26日閲覧)。
- (98) “... ut populi communiter regni Francorum elephantum in tempore imperatoris Karoli uiderunt.” Hack, *Abul Abaz*, p. 34f., n. 45.
- (99) 象がアーヘンの「動物園」で広く臣民に公開されていたとの説も古くから見られる、K. Hauck, Tiergärten im Pfalzbereich, *Deutsche Königspfalzen. Beiträge zu ihrer historischen und archäologischen Erforschung I*, Göttingen, 1963, pp. 30-74, pp. 45-47; G. Heuschkel, Zum Aachener Tiergehege zur Zeit Karls des Großen, W. Dreßen et al. (eds.), *Ex Oriente. Isaak und der weisse Elefant. Bagdad-Jerusalem-Aachen. Eine Reise durch drei Kulturen um 800 und heute. III*, Mainz 2003, pp. 144-155.
- (100) 9世紀初めサンドニ修道院で成立したカッシオドルス『詩編注解』写本 (BNF, Manuscripts, latin 2195) の fol. 9v における B の文字のイニシャル装飾に象の頭部が描かれている、M.-P. Laffitte and C. Denoël (eds.), *Trésors carolingiens. Livres manuscrits de Charlemagne à Charles le Chauve*, Paris, 2007, p. 145. この頁は <http://expositions.bnf.fr/carolingiens/grand/028.htm> 及び <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84262910/f26.image> で閲覧できる (2020年3月27日閲覧)
- (101) Kurze, *Annales regni Francorum*, p. 131.
- (102) 対ノルマン遠征に同行させていたことから、カールがこの象を戦象として利用していたと考える論者も多い。ハックは主として相手に恐怖を与える心理的效果のみを狙った投入であったと考えている、Hack, *Abul Abaz*, pp. 36f.
- (103) エインハルドゥス、ノトケルス（國原吉之助訳・註）『カロルス大帝伝』、筑摩書房、1988年。この史料の成立時期については学説が分かれており、现阶段では814年—830年の間としか述べられない、Art. *Vita Karoli Magni, Geschichtsquellen deutsches Mittelalters* (<https://www.geschichtsquellen.de/werk/2083>) (2020年3月27日閲覧)。
- (104) 『カロルス大帝伝』第16章、25-26頁（一部固有名詞のみ改編）。原文は O. Holder-Egger (ed.), *Einhardi vita Karoli magni, MGH Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum separatim editi 25*, Hannover, 1911, c. 16, p. 19.
- (105) 『フランク王国年代記』によると、800年にカールのもとを訪れたエルサレム総主教の使節は、カールに聖墳墓などの鍵と旗を贈っている (Kurze, *Annales regni Francorum*, pp. 112f.)。こうした象徴的な行為が拡大解釈された結果、「アッバース朝のカリフが聖地をカールに委ねた」というストーリーが生まれている可能性があるろう。総主教からの贈り物が具体的な権利付与を伴わなかったであろうことについては、Drews, *Karl, Byzanz und die Mächte des Islam*, p. 97f.
- (106) 一般にアインハルトの『カール大帝伝』は、カールの姿を過度に美化することなく描いた作品であるとみなされていて、その記述の歴史的信憑性は高いとされている、五十嵐修『地上の夢』、15-17頁。少なくともこのアッバース朝との使節交換について

て述べる部分に関しては、そうした評価は妥当しない。

- (107) 『カロルス大帝伝』、第2巻8-9、121-128頁；H. F. Haefele (ed.), *Notker der Stammler, Taten Kaiser Karls des Grossen, MGH Scriptores rerum Germanicarum, Nova series XII*, Berlin, 1959, II-cc. 8-9, pp. 59-65. この史料は、ザンクトガレンの修道士ノトケルスが、カール大帝のひ孫にあたるカール肥満王に宛てて880年代に執筆したものである、Art, *Gesta Karoli, Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters* (<https://www.geschichtsquellen.de/werk/3792>) (2020年3月27日閲覧)。
- (108) Borgolte, *Der Gesandtenaustausch*, pp. 131-135; Sénac, *Le monde carolingien et l'islam*, pp. 51f.; Hack, *Abul Abaz*, p. 33, n. 41. ただし聖地稅(上のまとめにおける10)については、完全な創作であるとは考えられていない、Borgolte, *Der Gesandtenaustausch*, pp. 136f.
- (109) このトピックを扱った文献は多数存在するが、ここでは M. Gabriele and J. Stuckey (eds.), *The Legend of Charlemagne in the Middle Ages. Power, Faith, and Crusade*, New York, 2008のみをあげておく。また小川直之「武勲詩におけるカール大帝の光明面と暗黒面」、『西洋中世研究』第12号、64-78頁も参照のこと。
- (110) Borgolte, *Der Gesandtenaustausch*, pp. 6-9.
- (111) 津田拓郎「『大立法者』としてのカール大帝」『西洋中世研究』第12号、78-91頁も参照のこと。
- (112) 例えば、註5で言及した『詳説世界史図録』の「8世紀の世界」の頁においても、カール大帝は14世紀の金の胸像とともに左上に配置され、同時代の他の君主らと比較しても圧倒的な存在感を示している。
- (113) 第2章であげた『岩波講座世界歴史』のイスラームを扱う巻ではフランク王国はほぼ言及されない。佐藤次高『世界の歴史8—イスラーム世界の興隆』でも、アンダルスを扱う部分におけるごく少数の例外を除くと、十字軍以前の叙述にフランク王国はほぼあられない。小ピピンと使節交換をしたマンスールに関する一般向けの書籍でも、フランク王国や小ピピンへの言及は一切見られない、高野太輔『マンスール—イスラーム帝国の創建者』山川世界史リブレット人、2014年。
- (114) わが国において「世界史」が成立した状況については、茨木智志「『世界史』教科書の出発」、長谷川修一・小澤実編『歴史学者と読む高校世界史—教科書記述の舞台裏』勁草書房、2018年、153-178頁。
- (115) なお、前近代史の扱いが小さい「世界史A」のほうがより、西欧中心主義の相対化やグローバル・ヒストリー的要素の取り込みに積極的であるように思われる。事実上入試科目として用いられなかったため、注目が集まりにくかった「世界史A」について、(それが「廃止」される今だからこそ) われわれは再評価を行うべきであろう。「世界史A」成立の背景やそのカリキュラムの特色については、鶴島博和他「世界史教育の現状と課題(II)」、『熊本大学教育学部紀要』63、2014年、33-42頁。

8・9世紀アフロユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国（津田）

- (116) 歴史総合の教科書が前近代史を全く扱わないものになるであろうことについては、君島和彦「新科目『歴史総合』とどう向き合うか」、『じっきょう地歴・公民資料』86、2018年、115頁。
- (117) 西欧中心主義的歴史像がもたらす弊害について、ここで多くを語る必要はないだろう。高等学校で世界史が必修となっている現在でも、学生が提出するコメントペーパーには、「やはり西欧は（アジア・アフリカと違って）進んでいる」、「何をするにも白人は優れている」などといった素朴かつ危険な意見が散見されるのである。
- (118) こうした問題意識については、森悠人・津田拓郎「中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて」、『史流』47、2020年、63-86頁でもあつかった。津田拓郎、コンラート・フレンツェル「日独の中等教育課程における歴史教育の現状と課題」、『史流』48（2021年3月刊行予定）も参照のこと。
- (119) ただし、過去には中学社会の「歴史」分野においても、現在以上の分量を割いて世界の歴史が教えられていたことを忘れてはならない。「歴史総合」設立の目的の一つであろう、日本史と世界史をバランス良く組み合わせた「歴史」は、かつての中学校の歴史教科書ですすである程度実現していたともいえる。そしてそこには前近代も含まれていたのである。
- (120) 「静止画的」な観察については、千葉敏之「総論 巨大信仰圏の出現」、同編『歴史の転換期 4—1187年 巨大信仰圏の出現』山川出版社、2019年、2-27頁、特に2-5頁。こうした「世界史」の可能性は、羽田正『新しい世界史へ——地球市民のための構想』岩波新書、2011年も提唱しているものである。著者は歴史学者としては、羽田による「時系列史」の徹底的な否定に全面的に賛同するものではないが、学校教育という学習時間が限られた場においては、羽田の提唱する「新しい世界史」は極めて大きな有効性をもつものであると考える。

（北海道教育大学旭川校）